

富山県氷見市

藪田薬師中世墓発掘調査報告書



1985年3月

氷見市教育委員会
富山県砂防課

例　　言

1. 本書は、急傾斜地崩壊防止工事に伴う富山県水見市萩田薬師中世墓の発掘調査報告書である。調査は、昭和59年7月20日から同年8月14日にかけて実施した。
2. 調査は、富山県砂防課から委託を受けて、水見市教育委員会が実施した。また、調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けた。
3. 調査事務局は、水見市教育委員会社会教育課に置き、庶務は主事 竹越善和が担当し、課長 斎藤道雄・課長代理 楽澤信一が統括した。
4. 本書の表題は「萩田薬師中世墓発掘調査報告書」であるが、これは緊急調査の際、富山県砂防課と取り交わした契約書に基づくもので、内容としては、中世墓の他に古墳時代末期の横穴墓2基の報告も含む。
5. 調査参加者（調査指導）富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事 酒井重洋（調査担当）水見市立博物館学芸員 岡本恵一・水見市教育委員会社会教育課主事 竹越善和（調査補助）富山考古学会会員 柴一良（発掘作業）谷沢有美・奥山祐政・横山守彦・出口庄一・前富志雄・松沢七郎・凌豐秋・一の谷勝子・朴木昌子・高柳良子・西木とき・天坂幸子・山口きみ子（遺物整理）田中恵・浦野裕子
6. 本書に掲載した遺構実測図は、酒井・岡本・竹越・柴が作成した。写真撮影は、遺構を酒井・岡本・竹越・柴が行ない、人骨以外の遺物は、岡本・竹越が行なった。人骨の撮影は富山医科大学医学部森沢佐彌助教授が行なった。
7. 人骨は、富山医科大学医学部松田健史教授・森沢佐彌助教授に鑑定していただき、玉稿を賜った。
8. 調査ならびに報告書作成に際しては、次の各氏に指導・助言・資料の提供を受けた。
　　湊　晨（水見市文化財審議会会長）橋本芳雄（同委員）児島清文（同委員）圓佛三郎兵エ（水見市教育委員）
　　京田良志（高岡高校教諭）斎藤隆（富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事）富山県水見上木事務所
9. 本書の編集・執筆は、酒井・岡本・竹越が分担して行ない各々の責は文末に記した。

目　　次

I 位置と環境	1
II 調査に至る経緯	1
III 調査の経過	2
IV 遺構と遺物	3
1. 第1号穴	3
2. 第2号穴	13
3. 第3号穴	13
V 萩田薬師横穴墓群の出土人骨について	16
はじめに	16
1. 第1号横穴出土人骨	16
2. 第2号横穴出土人骨	19
3. 第3号横穴出土人骨	21
おわりに	23
VI まとめ	26
図　版	

I. 位置と環境

永見市は能登半島の基部にあたり、富山県の北西部に位置している。永見市の西側は、宝達丘陵、石動山丘陵によって、石川県との県境となり、南側は二上山丘陵によって、西筋波・高岡市と接している。富山湾に面した、約20kmに渡る永見海岸一帯は、能登半島国定公園の一部であり、ここから富山湾を経て立山連峰を望むことができる。

甚石峰から石動山を結ぶ緩線の西斜面は、一般に急傾斜をなして邑知渴低地帯に延び、東斜面は、緩傾斜をなした低山性丘陵が延び、一気に断崖となって海岸に落ち込み、海岸線を形成している。今回発見された遺跡は、この海岸線の入口付近に位置する藪田地内であり、標高68m余りの薬師山より富山湾に向って舌状に突き出た丘陵の、海岸から約300m山側に入った南斜面で、地上高約8m～12mの間に位置している。

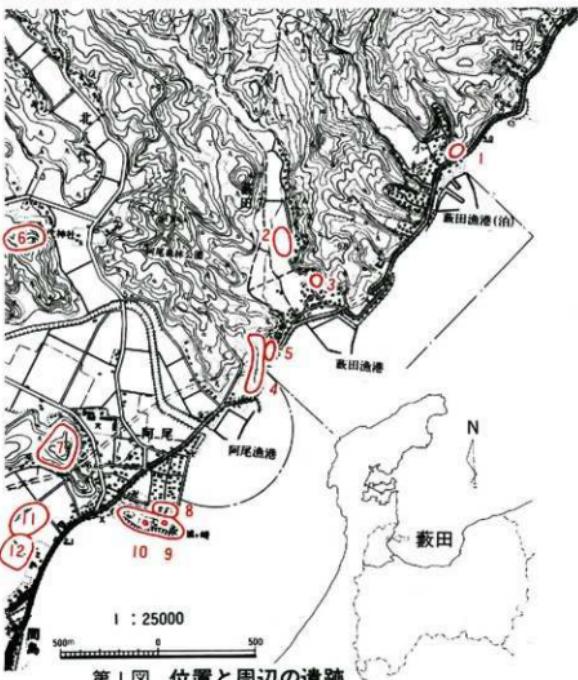
周辺の遺跡としては、この遺跡の北約1kmの海岸に面した所に、人骨、土器片の出土している泊洞窟がある。また、藪田薬師横穴墓群の所在する谷間の水田地帯には、縄文時代から平安時代にかけての藪田遺跡があり、縄文土器、須恵器、土師器が出土している。この谷をはさんで対峙する小丘陵の海岸に面した所には、瀬戸が谷内横穴墓群(消滅)。さらに、その背後の山の山上には、約300mの長さに渡って戦国時代末期の山崎城跡がある。これより阿尾川を渡って南へ進むと、海岸に突き出た状態で、県指定文化財「阿尾城跡」があり、この近辺には、古墳時代の阿尾横穴墓群、阿尾遺跡、古墳時代から中世にかけての阿尾島田A遺跡、並びに中世の阿尾島田B遺跡がある。

II. 調査に至る経緯

昭和59年7月4日に、藪田字薬師地内で行なわれていた急傾斜地崩壊防止工事が、工事予定面積の約半分進んだところで、掘削中の崖面より2つの横穴が発見された。工事関係者から連絡を受けた藪田区長が現場へ赴き、2つの横穴を確認し、うち1基の横穴に、墓石状のものが埋っているのを認めた。同日中に、永見市文化財審議委員橋本芳雄氏から連絡を受けた永見市教育委員会は、翌6日現場へ赴き、五輪塔、宝篋印塔等石造物の埋っている横穴1基及び、その左隣りにも横穴1基を確認した。

この後、市教育委員会は、開発側の富山県永見土木事務所と地元とをまじえ、数度の協議を重ねた。さらに7月13日には、現場で県文化課と打合せを行ない、

1. 泊洞窟
2. 藪田遺跡
3. 藪田薬師横穴墓群
4. 山崎城跡
5. 瀬戸が谷内横穴墓群
6. 伝八代城跡
7. 三角山城跡
8. 阿尾遺跡
9. 阿尾城跡
10. 阿尾横穴墓群
11. 阿尾島田A遺跡
12. 阿尾島田B遺跡



第1図 位置と周辺の遺跡

午後から、市文化財審議会を開いた。審議会では、県水見上木事務所からと、高岡高校京田良志教諭にも出席していただき、遺跡の内容及び、今後の対応について審議した。この結果、現在は遺構の大半が埋っているため、遺構の内容が不明確であり、また急傾斜地崩壊防止工事中の発見であり、崖崩れの危険性もあるので、記録保存を前提とした緊急発掘調査を行なうこととした。

この審議結果を受けて市教育委員会は、現在進められている小久米A遺跡発掘調査を、7月13日から8月2日まで中断し、戸田薬師中世墓発掘調査を行なうこととした。この後、県砂防課及び、県埋蔵文化財センターと戸田薬師中世墓発掘調査について協議を重ねた結果、調査に係る費用は県砂防課が負担し、県文化課から酒井草洋文化財保護主事の派遣を受けることとして、7月20日から水見市教育委員会が主体になって緊急発掘調査を行なうことになった。また、調査途中には、富山県考古学会会員柴一良氏にも調査協力をお願いしたところ、快諾を得られたので、8月3日から調査に加わっていただいた。

III. 調査の経過

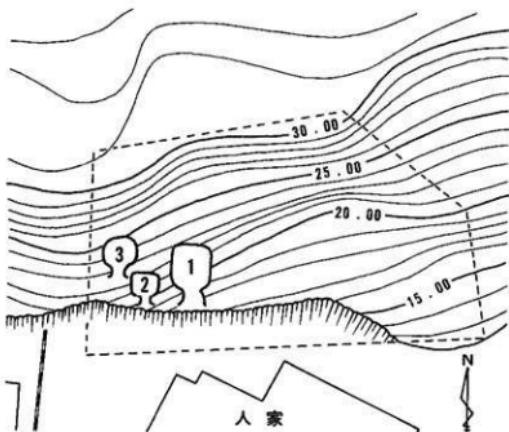
発掘調査を行なうにあたり、五輪塔、宝篋印塔等石造物の埋蔵されている横穴を1号穴、その左隣にある横穴を2号穴とし、これらの横穴の上に、新たに表土の一部崩壊により発見された横穴を3号穴とした。まず、7月20日から7月31日にかけて、1号穴、2号穴を調査し、続いて8月2日から8月14日にかけて、3号穴を調査した。

1号穴の調査については、横穴の覆土をある程度まで除去し、石塔を水洗いした。この時、1基の宝篋印塔から、「如祐修塔」の文字が刻まれているのを発見する。割り付けをし、遺物出土状況の平面図及び断面図を作成した後、遺物を浮いた状態のものから、記録しながら順番に取り上げ、同時に、残りの覆土を除去していった。遺物及び覆土を完全に除去した後、横穴の平面図、断面図を作成した。この結果、1号穴からは、五輪塔、宝篋印塔の構成部分62個（これらのうち、組立てが可能と思われるものは、五輪塔3基、宝篋印塔3基）

板石塔婆12点、石仏1点、並びに土師質小皿、銅錢、火葬骨等が出土した。

2号穴、3号穴の調査については、覆土を除去し、遺物出土状況が明確になつた後、遺物を記録しながら1点ずつ取り上げ、平面図を作成していった。遺物を全て取り上げた後、残りの覆土を完全に除去し、横穴の平面図、断面図を作成した。この結果、2号穴からは、人骨、須恵器壺、鐵滓、貝殻、少量の火葬骨が出土し、3号穴からは、人骨、須恵器壺身4点、土師器鉢2点、鐵刀、刀子、金環等の金属器、貝殻、少量の火葬骨が出土した。

（竹越喜和）



第2図 遺構分布図 $S = 1/250$ 破線内は工事施工区域

引用・参考文献

- 今井 巧・坂本 幸・野沢 保「邑知海・虹が島地域の地質」地質調査所 1966
同本志「戸田薬師中世墓の発掘調査」『富山県埋蔵文化財センター所報第9号』1985

IV. 遺構と遺物

1. 第1号穴(第3図、図版-1~3)

構造

南面する急傾斜地の標高約18m(地上高約8m)~23mの間に、ほぼ真南に向って開口する3基の横穴のうち最大の規模を誇り、入口部からの奥行約3m、奥壁幅約2.3m、天井部の最大高約2.2mを測り、奥壁はほぼ垂直に、天井部は急角度に立ち上がるため、床面の段しか覆っていない。側壁はゆるやかな弧を描いて天井部に至り、その横断面は半月形を呈する。

穴内の平面形は長方形を基調とするが、やや胴張りぎみで、天井部が跡切れるあたりで側壁がゆるやかに入口部に向って折れ上がる。また、壁の高さも徐々に低くなり、入口部で床面に至り内外を分け、入口前面には、低い段をもつ平坦面が設げられている。

床面は2段に掘り凹められており、中央部は1辺約90cmの略正方形で深さ30cmに、また、その幅で入口まで深さ15~20cmに凹められ、前面の平坦面に続く。入口側からみると、中央が掘り凹められ、両側壁、奥壁側の3方に塗が設けられているような観である。中央の略正方形の凹みから浅く細い溝状のものが前面の平坦面へとのび、平坦面の低い段に沿って崖面に至るが、浅すぎるため、中央の凹みの排水溝とは考えられない。

その他、入口部より1m程なかに入った両側壁際の床面の2ヶ所に、直径6cm前後で深さ約30cmの穴が穿たれている。その断面形は、先端の尖った棒状のものを突き刺したような形である。両穴を結ぶ直線は、中央五輪塔の前面を通るため、この五輪塔に関連する何らかの施設——柱頭などを持つための柱痕と考えられる。^{40c}

遺物の出土状況

1号穴からは、五輪塔・宝瓶印塔・板石塔婆・石仏などの石造物の他、火葬骨・土師質小皿・銅鏡・釘などが出土しているが、五輪塔・宝瓶印塔は各構成部分が別石より成るため、基礎を残して上部の幾つかの部分が倒壊、あるいは積み直された状態で出土し、完形塔として出土したものは宝瓶印塔1基(第7図-33)だけである。そして、石塔の基礎や板石塔婆・石仏などは、床面直上に置かれたものから、床面を覆った覆土中に建てられたため、床より數10cm浮いた状態で出土したものである。また、その他の遺物も同様な出土状況を示し、火葬骨は、壁際、入口部と中央五輪塔下を除いて一面に散らばっていたが、幾つかの石塔の基礎や基壇の下で集中して検出されたものもある。

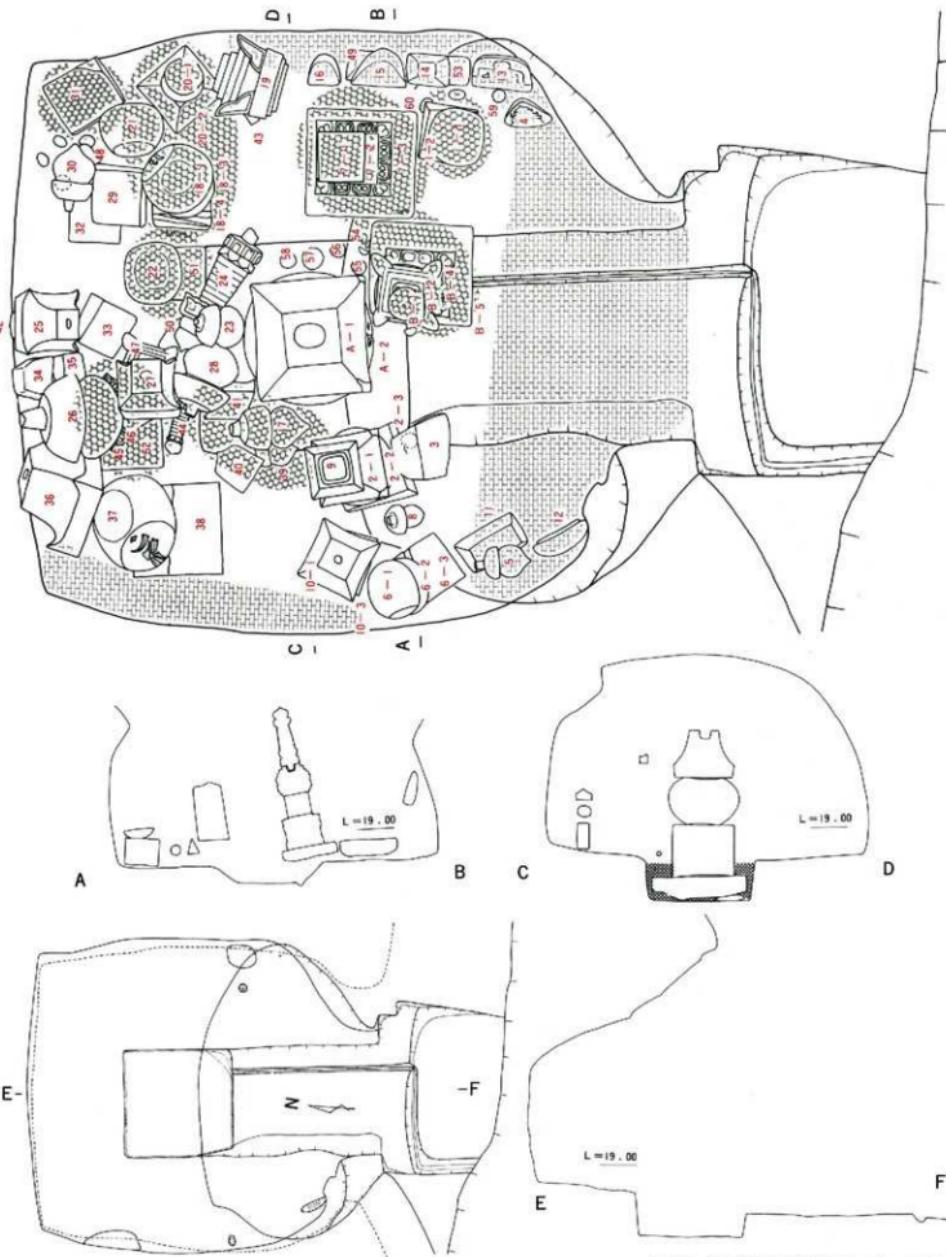
各遺物の詳細な出土状況は紙面の都合上記述しきないので、幾つかのものについて述べることとする。

まず、当穴の主で最も古いと考えられる中央の五輪塔は、空風輪が奥壁側に倒壊していた他は、各輪とも原位置を保ち、1辺約90cmの略正方形、深さ30cmの門みのなかに、長辺約75cm、短辺約33cm、最大厚約20cmの割石2枚を敷き、(組み合わせた状態で中央部に長辺約20cmの梢円形の穴ができる)その上に地輪を置き、凹みと基壇や地輪のすき間に砂をつめる。この塔からは火葬骨の出土はない。

次に、最も新しく造立されたと考えられる一番入口近くに認められた宝瓶印塔(第7図-33)は、床面より約20cm浮いた所に基壇を敷き、その上に塔を建て、塔身と基礎の間に小さな火葬骨片を認め、基盤直下にも小さな火葬骨片と5cm程度の間隔を挟んで大量の火葬骨を収めていた。同穴で、火葬骨の極一部だけを石塔下に収めた例として第3図-38の地輪の塔(第4図-2)が挙げられる。この塔は地輪の一部が自重で崩れたため上部の各輪が奥壁側に倒壊していたが床面直上の地輪は原位置を保っていた。この地輪の底面は、直径約20cm、深さ約15cmの納入穴が穿たれており、床面上に蓋かれた小さな火葬骨片を覆う様な状態であった。

その他、板石塔婆では、床面からかなり浮いたもの(第8図-43)から床を掘り凹めて倒れないようにしたもの(第8図-42)自然石の台石を床面に置き、その上に塔を据えたもの(第8図-38)などが検出された。

これらの出土状況からみて、中央の五輪塔を中心に墓標として五輪塔や宝瓶印塔が造立され、壁際には供養塔とし



第3図 1号穴実測図 最上段は $S = \frac{1}{20}$ 他は $S = \frac{1}{40}$

(Hatched area) Hibon-ga saku ni tenketsu sareba natta tokoro
 (Cross-hatched area) Hibon-gaまとめて tenketsu sareba natta tokoro
 (Solid black area) Sand layer

て板石塔婆、石仏が認められていったと考えられる。

遺物

※五輪塔（第4図-1～10・第7図-11～31・図版-4・6）

五輪塔は各構成部分47個が出土しているが、完形塔として出土したものはない。しかし、法量からみて、大きいもの上位3基が完形塔として復元できる。その他の各輪は、法量的にも形態的にもほとんど相異なく、組み合わせの推定は困難である。そこで、似かよった法量のもののうち、出土状態の組み合せで復元したものがあるが、積み替えの可能性は残る。また、確実に積み替えられている図-4と図-29、および、図-6と図-24・26はそれぞれ組み合って出土したが、切り離して復元した。

各輪の形態は、完形塔として復元できる図-1・2の空風輪と図-9が他のものと趣を異にしている。図-1の空風輪は、宝珠と蓮花の間にヒ首を施し、図-2の空風輪と図-9は、宝珠と蓮花の境の割りが他のものより深く入るため、宝珠が丸味を帯びている。

火輪は、空風輪とともに一石でつくられた図-21を除いて軸口を僅かに斜めに切り下げ、下端をほぼ一直線に造るが、下端の隅を僅かに反らしたもの（図-17）や、火輪底面の中央部を僅かに盛り上げたもの（図-18・19・20）などもある。

水輪は、中央部ならびにやや上方に最大幅をもつ楕円形の上下を切り取った形を呈し、中央正面に図-1のそれを除き金剛界大日如来の種子「バ・ン」を篆研彫し、円相を添える。図-1の種子は「バ・ン・ク」のつもりでもあろうか定かでない。

種別	点数
空風輪	11
火輪	11
水輪	12
地輪	11
基壇	1
空風火輪	1
相輪	3
笠	3
塔身	3
基礎	3
基壇	3
III類 バン	5
IV類 五輪陽刻	1
V類 五輪陰刻	1
VI類 五輪陽刻	5
石仏	1
一石一尊仏	1

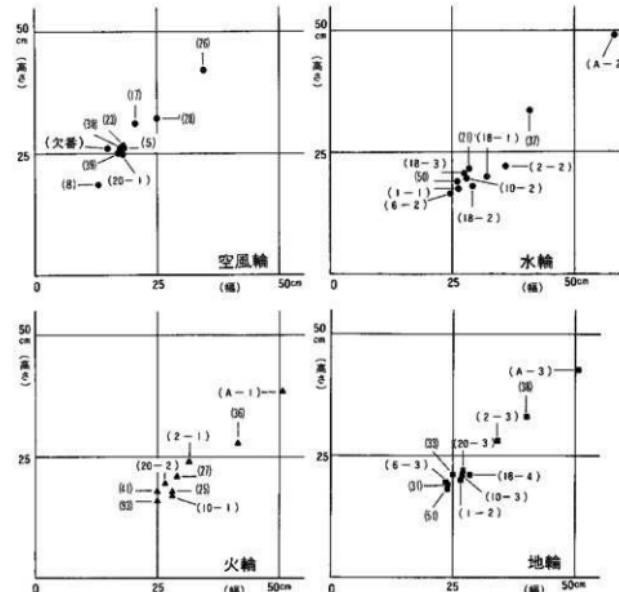
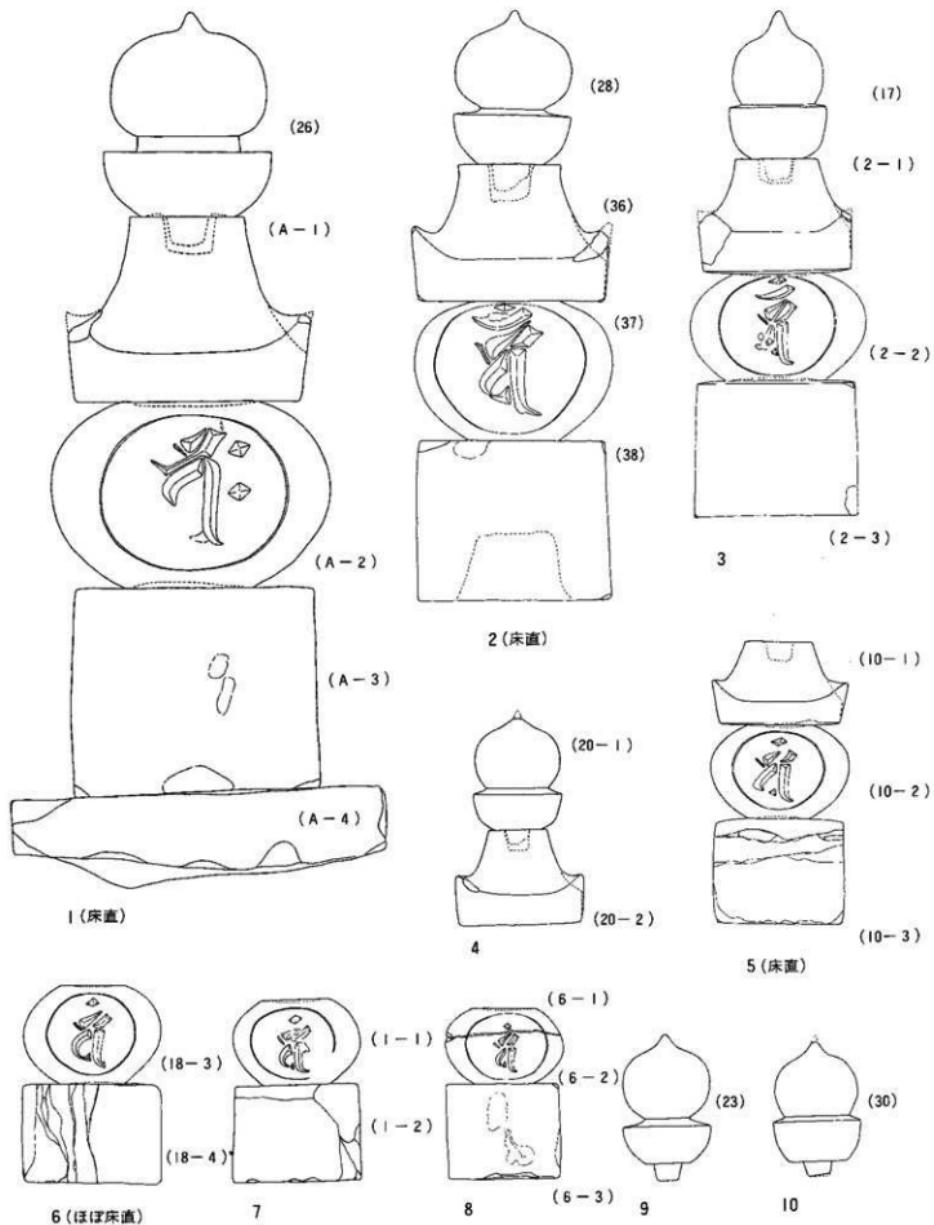


表1 出土石造物内訳

表2 五輪塔各輪法量表



第4図 1号穴出土五輪塔実測図 $S = \frac{1}{10}$ 括弧内数字は第3図と同じ



地輪は、奥行と幅がほぼ等しく、上方よりも下方を僅かに広げ、高さよりも幅がひろいものばかりである。図-2の地輪のみに納入穴が穿たれている。

完形塔としての全体的なプロポーションは図-1と3が、水輪の最大幅が極端に大きく、それに対して火輪が小さく不安定な正面観を与えるが、図-2の方は、各輪のバランスがとれており重厚な感じである。

年代的には、各輪ともに細かな相異は認められるものの、全体としては前後関係を指摘し得る形態差は認められない。そのうえ、在記年銘のものが1点もなく、造立年代は不明確であるが、各輪の形状、特に火輪から室町時代のものに比定できるようである。

近辺の室町時代の五輪塔で、在記年銘の五輪塔として、能登穴水町明千寺鎌倉屋敷の永享三年（1431）銘塔（第5回）が知られている。また記年名は無いが、戸田1号穴と同様に崖面の横穴に収められた五輪塔で、室町時代前期～中期に比定されている3基の五輪塔（第6回）が、同じく能登富来町の地頭町に所在している。

これらのものと1号穴出土のものを比較してみると、非常によく似ている。しかし、水輪部については、上記2ヶ所の正面観が円形の上下を切り取ったようなものに対して戸田の水輪は梢円形で、押しつぶされた様な感じである。この相違が地域的なものなのか、時間的な前後関係を示すものであるのかは定かでないが、後述する他の石塔などからみて戸田の形状が後出的なものと考える。

つまり、戸田1号穴出土の五輪塔は、中央の大型五輪塔が一番古く15世紀の第2四半世紀ごろの造立で、つぎに床面直上のものから覆土上のものへと15世紀の第4四半世紀まで造立されたと考えている。

出土五輪塔の石材は全て微粒砂岩である。

東宝鏡印塔（第7回-32-34・図版-4・5）

完形塔として出土した図-32を含め、全て完形塔として復元できる。3塔ともに基壇を有し、基礎は壇上積式で、格狭間の形状はそれぞれ微妙に違い、図-32・33は線刻、図-34は陰刻である。基礎上端は背の低い反花が施こされ、図-32は複弁2葉を配し、隅も複弁を、図-33は複弁1葉と隅に複弁を、図-34は複弁2葉を配し、隅には單弁を刻出している。

塔身には図-32が「如祐逆修」を刻み、方形の輪郭を添え、図-33・34はともに「パン」を篆研影し、前者には方形の輪郭を後者は円相を添える。

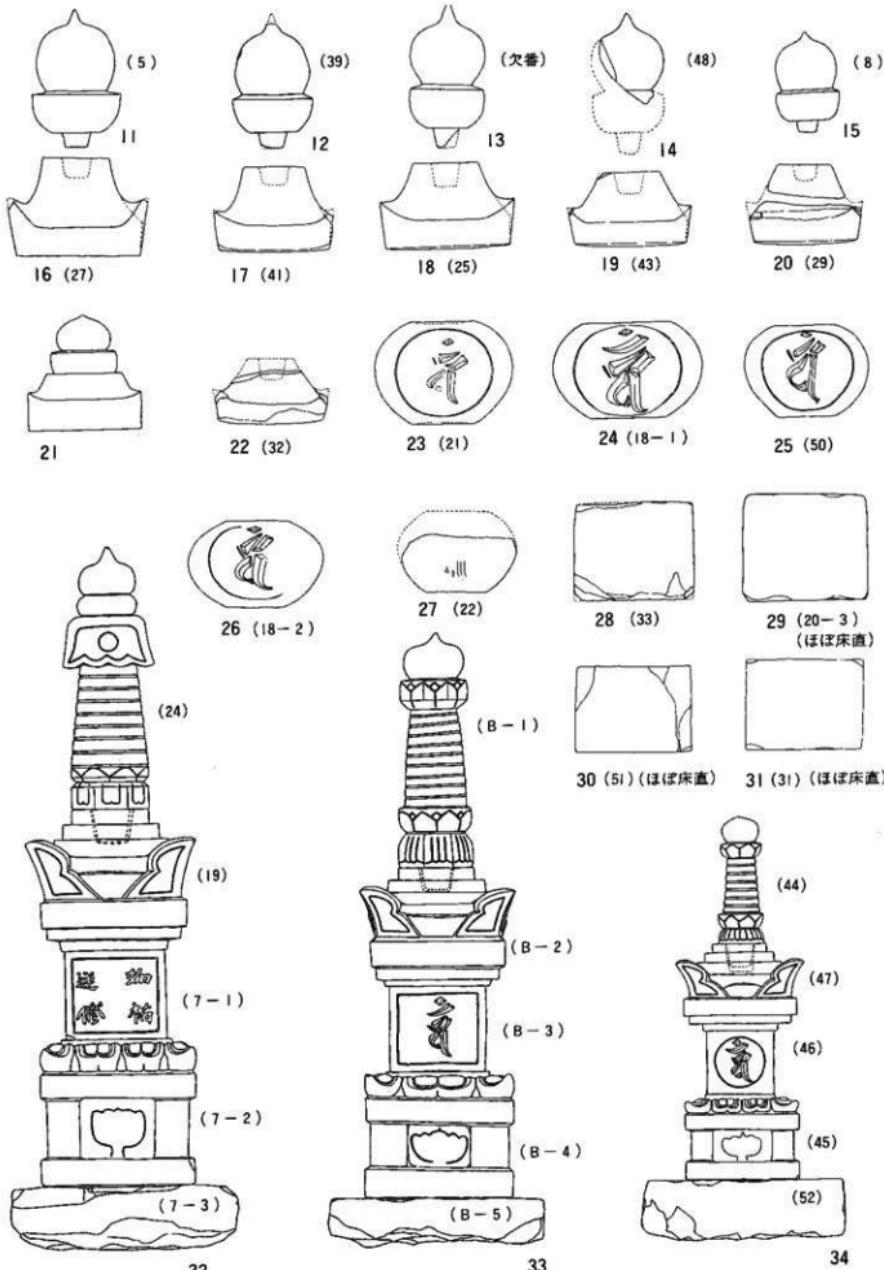
笠は3塔ともに下段は2段、上段は5段で、隅脚突起は軒端よりやや内側から立ち上がり、軒端を越えて外傾し、線刻の輪郭が施こされている。

相輪は伏鉢・詣花・宝珠の詣花の線刻による文様がそれぞれ違い、また、9輪が刻まれているのは図-33だけで他の2塔は7輪で、図-32には中央に線刻による円と縁には輪郭が施された水煙が付けられている。

各塔の造立時期は各部の形状からみて、室町時代のものと考えられる。また、その出土状況から、一番手



写真1 石動山五智院跡 延徳在銘宝鏡印塔基盤



第7図 1号穴出土五輪塔・宝蓋印塔実測図 $S = \frac{1}{10}$

括弧内数字は第3図と同じ

前に認められた岡-33が新しく、奥の方に認められ、基盤が最も床面に近かった岡-34が古いものと考えられる。

近辺の在記年銘の宝篋印塔としては、能登鹿島町国指定史跡石動山の五智院跡に在る延徳年間（1489～1491）在銘の宝篋印塔基礎（写真-1）¹³⁾が挙げられる。この塔と比較すると、格状間、基礎上端の反花の形状が岡-33のものと似似かよっている。しかし、延徳在銘塔の場合、反花の背が高く厚肉で、複弁1葉と隅の複弁の間に間弁を施している。それに対し岡-33のものは、線刻状の刻みである。石材は延徳在銘塔が安山岩であり、1号穴のものが砂岩であるため、石材の違いによるものかも知れないが、岡-33の基礎の方が簡略化された感じをうえ、後出的である。

出土宝篋印塔の石材は、全て微粒砂岩である。

* 板石塔婆（板碑）（第8図-35～44・図版-5）

米見市を含む能登半島基部の石動山山麓一帯の板石塔婆系石塔は、用材とその形状に信仰標識を加えることにより、一応、I・方錐形に種子、II・自然石や削石に種子、III・やや偏平な方錐形に種子、IV・やや偏平な方錐形に五輪塔形、V・板状削石に五輪塔形、VI・川石に五輪塔形の6つに分類されている。¹⁴⁾

1号穴からはⅢ類（図-35・36・37・38）ほか1点、IV類（図-39・40）、V類（図-41・42・43・44）ほか1点に属する計12点が出土している。このうち、IV類には線刻五輪图形と陽刻五輪图形がみられるが、V類は全て陽刻である。

また、IV類、V類ともに五輪の区別の線を施したものはないが、同穴出土の五輪塔が全て別石から成るもので、一石五輪塔が1点もみあたらない点や五輪图形の形態からみて、別石五輪塔の外形を模したものと考える。

編年観は、III類が先行し14世紀後半にはじまり、15世紀に至り、五輪塔を信仰標識としてとり入れIV類に転化、そしてV類はその頃盛行していた一石一尊仏の影響を受けてV類に変化し、15世紀から16世紀いっぱいの時期が考えられている。¹⁵⁾

出土板石塔婆の石材は全て微粒砂岩である。

* 一石一尊仏（第8図-45・図版-5）

開口部から向って右側の床面上に常に立てかけるようにして認められていたもので、薄く長い微粒砂岩の割石中央部より上半に如来形の像の上半部を中肉に刻出している。下半部は省略され、手の部分も同様である。

一石一尊仏の展開は、14世紀から一部16世紀に及ぶ長期間が考えられているが、厚肉のものに古出のものがあるという。1号穴の一石一尊仏は、他の石塔と比べ、少し風化が進んでおり、目鼻立ちちはっきりしない。屋外に置かれていたものが、1号穴造営の際、あるいは早い時期にとり入れられたものかも知れない。

* 土師質小皿（第10図-1～49・図版-7）

土師質小皿は、完形品、破片を含めて60点出土した。そのうち復元できるものは49点で、4つのタイプに大別できる。

I類（第10図-1～16）

平均口径8cm、平底に近い丸底で、底部と胎部の境に明瞭な段をもち、口縁部は外反ぎみに開くもので、色調は明褐色を呈する。火を受けて茶褐色に変色した破片1点（図-9）がある。

II類（第10図-17～19）

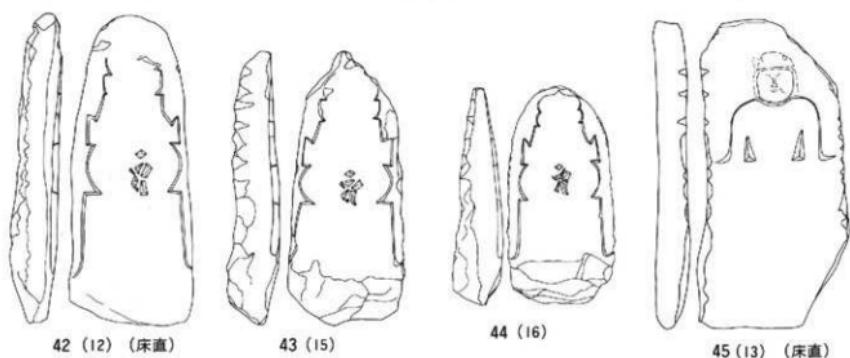
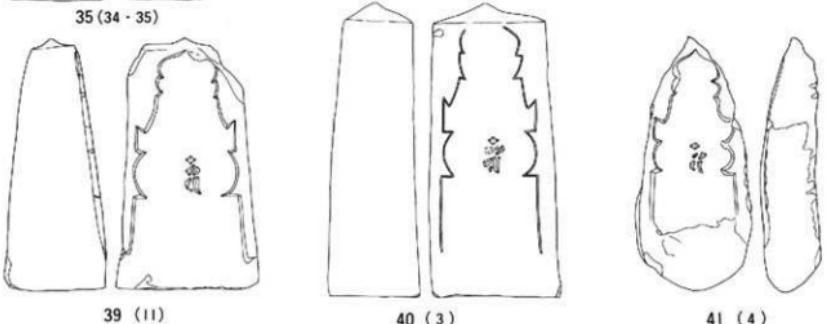
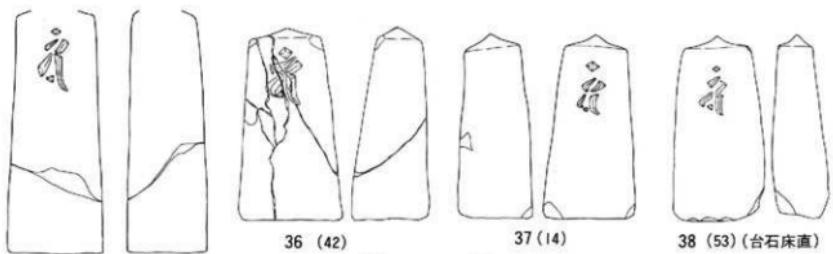
胎上・色調はI類と同質であるが、底部と体部の境に段が認められず、かつ、浅器高の低いもの。平均口径8.3cm。

III類（第10図-20～24）

丸底で、底・胎部の区別がなく、断面形が半月形を呈するもの。胎土・色調は、I・II類と同質。平均口径8.2cm。

IV類（第10図-25～45・48）

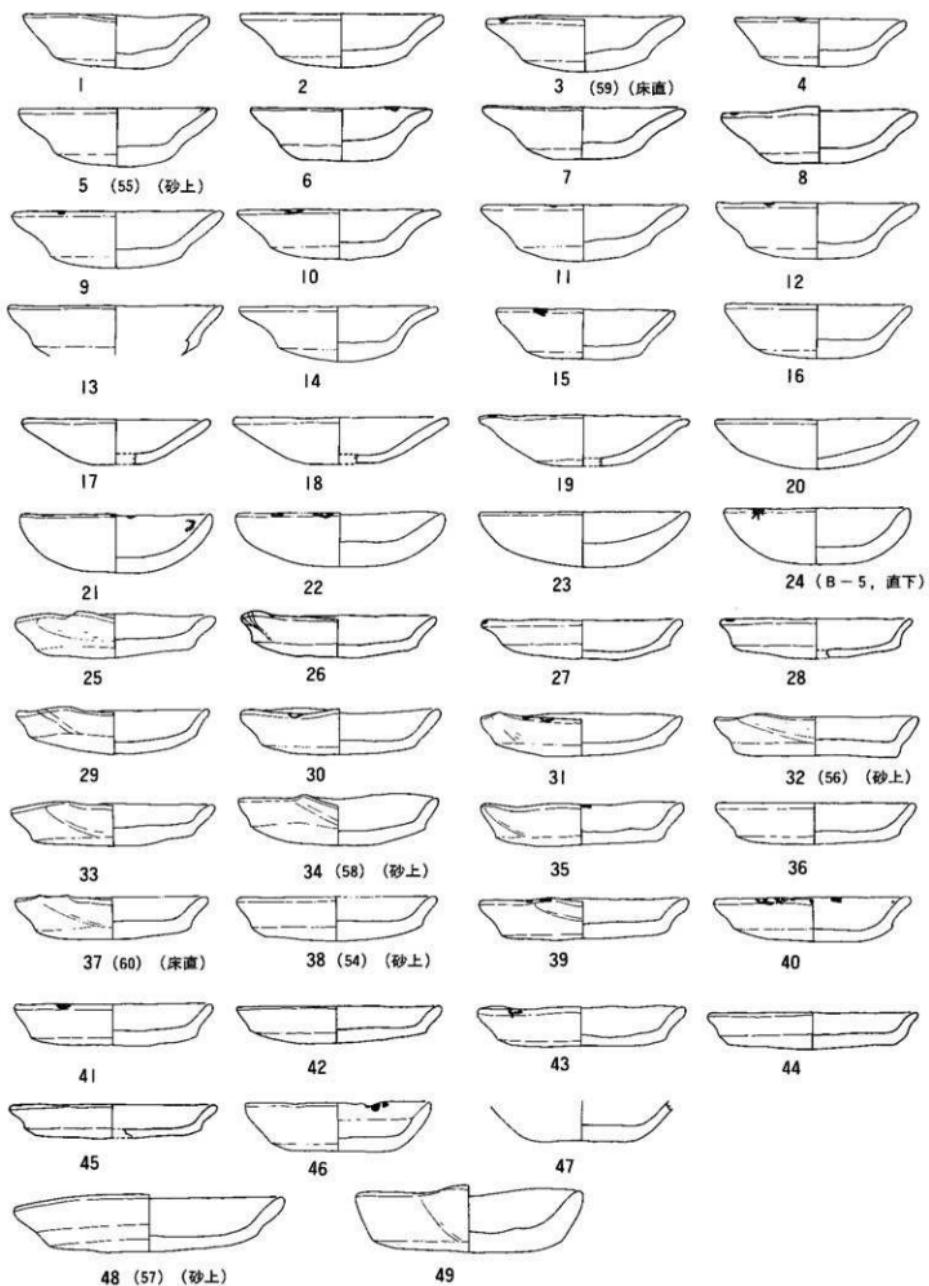
平底および、やや丸味を帯びた底をもつ。底部と体部の境いで、体部外面に強くヨコナデを施すために、明確な段をもつ。体部はヨコナデのため外面が外傾し、ナデの終わりは口唇部にナナメにぬけるため、その部分でゆがみが生



第8図 1号穴出土板石塔婆（板碑）・一石一尊仏実測図 $S = \frac{1}{10}$ 括弧内数字は第3図と同じ



第9図 1号穴出土銅錢拓影 $S = \frac{1}{2}$



第10図 1号穴出土土師質小皿実測図 $S = \frac{1}{2}$ 括弧内数字は第3図と同じ

じている。また、色調・胎土は、I～III類とは異質で、灰白色を呈する。平均口径8.2cm。

各類はそれぞれ口縁端部のおさめ方や底部の形態、口径などからさらに細分できるかもしれない。特にIV類は平均口径8.2cmのものほか、口径11.0cmのものが1点（図-48）出土している。また、この分類外のものとして、図-46、49があるが、胎土・色調はI～III類と同質である。

土師質小皿の出土状況は、床面上に石塔に添えられるように置かれたものから、覆土中からのもの、石塔直下で碎かれたように出土したもの等いろいろあった。このうち、I・IV類の幾つかが床面直上から出土し、III類の1点は、宝鏡印塔基壇（第3図-B-5）直下の覆土中から出土している。

石塔造立や火葬骨納入の際に攪乱を受け、原位置を保った小皿は数少ないと思われるが、その出土状況からみて、I・IV類が、III類に先行するものと考える。年代的には、石造物とからんで、I・IV類は15世紀の中頃、III類はそれ以降で15世紀一杯の年代観を与えておく。

※銅錢（第13図-I～13・図版-7）

北宋銭12枚、南宋銭1枚の計13枚が出土している。このうちの1枚、政和通寶が2次的な火を受けて桃褐色に変色している。土師質小皿の破片のなかにも2次的な火を受けたものがあり、興味深い。以下、銭名と初鑄年を記す。

宋通元寶・北宋・960年（図-1） 天聖元寶・北宋・1023年（図-2） 崇寧通寶・北宋・1039年（図-3・4）

嘉祐通寶・北宋・1056年（図-5） 元豐通寶・北宋・1078年（図-6・7） 元祐通寶・北宋・1086年（図-8）

紹聖元寶・北宋・1094年（図-9・10） 圣宋元寶・北宋・1101年（図-11） 政和通寶・北宋・1111年（図-12）

淳熙元寶・南宋・1174年（図-13）

※釘（図版-7）

覆土中から2本出土している。ともに折れ曲っており、復元すると全寸5.5cmと5.7cmとなり、表面には赤色顔料が施されている。火を受けた痕跡は無く、またはほとんど腐蝕していないため、棺や、壁に打ち込まれて供用されたものではない。（蘇井横穴墓群で実測用に壁に打ち込んだ釘は一日で腐蝕してしまったうえ、簡単にはとれなかった。）いかように用いたかは定かでない。

小 結

1号穴からは、30基ちかくの供養塔や墓標としての石塔が出土し、幾つかの五輪塔、宝鏡印塔では、それぞれの石塔に伴う火葬骨が検出された。中央五輪塔からは1点の火葬骨も検出されなかつたが、次に造立されたと考えられる床直の塔（第8図-2）からは火葬骨片2点が出土し、覆土中に立てられたものには多量の火葬骨が認められており、最初は供養塔として五輪塔が認められ、それを取り扱むように順次墓標としての石塔が認められたと考えられる。

その他、「如祐逆修」の文字を刻む宝鏡印塔下の火葬骨が少年期骨と考えられることは（出土人骨については別頁に詳しい）、「逆修」の意味を考えるうえで興味深い。また、当穴の特異な構造は、中世時に開口した先代の横穴墓を拡張、再利用したためと考えられる。

（岡本 荻一）

註

①大島彦彦編「満座日本の民俗6 年中行事」1978 図版117～120頁に笠櫛の諸例が紹介されている。これによれば、竹などを數本立て、しめや漬木を渡し、色々な供物を飾るという。同穴についてはこの様な例が考えられる。

②櫻井基一・鷹川明史「地蔵町中世墳墓」『富良町史稿資料編』1976 同書によれば、横穴は中世墳墓群と記述され、幾ヶ所に散多くみられる中世の墓制「ぐやら」との関連が指摘されている。

③櫻井基一・瀧井賀太郎・渋谷亮太・鷹川明史「能登石動山」北國出版社1973

④京田良忠・岡本基一「5・石造物と関係跡第一石動山下の石造物」『富良町石動山信仰遺跡調査報告書』水見市教育委員会1984

⑤同 前

⑥同 前

⑦京田良忠「笠の川石に刻む石材化」『富山の石造美術富山文庫5』巧手出版1976

引用・参考文献

藤原良志「北陸に於ける宝鏡印塔の形式」『史達と美術第290号』1958 同「北陸の大型五輪塔十余基一ならびに月輪周辺に蓮座を配する遺品について」『史達と美術第312号』1961

井上光貞監修「国説歴史叢書事典」山川出版社1979

庚申懸詔会編「日本古事記叢書第2版」雄山閣1980

「石動山大平寺歴史資料調査報告書」石川県教育委員会1980

福澤邦夫「石造文化財」「能勢町史第4巻資料編」能勢町1981

「奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和55年度」奈良市教育委員会1981

「水見の石造美術—石動山石碑を中心として」水見市立博物館1985

2. 第2号穴(第11図、図版3・7)

第2号穴は、第1号の西側約5mに並び位置する。発見時には1部が開口し、玄室内は多量の土砂が流入堆積する。前底部は、斜傾約70度の急斜面に位置するためかほとんど認められず羨道部と玄室が残る。玄室は、羨門部の天井の一部が落盤するがほぼ原形を保っている。また羨門部の封鎖は、認められない。遺物及び人骨は、玄室奥部分に散乱した状態で検出され、人骨は3体が確認できる。また、玄室西側部分に火葬骨が床面よりやや浮き上った状態で検出されており穴内へ、直接埋納した人骨と火葬しその後埋納する2者の埋納形態がみられる。遺物は、細かく打ち割られた須恵器壺・鉄滓、一部を打ち割ったサザエの貝殻・アナグラ属の貝殻が出土している。

構造

羨道は、幅約65cm、長さ約40cmで残り羨門部へとつなぐ。羨門部は天井が落ち床と両壁が残る。封鎖用の施設は認められない。玄室は、長辺約1.8m、短辺約1.5mの方形で玄室奥部分が幅約50cm、高さ約7cmで一段高くテラス状となっている。周壁溝は幅10cmで奥壁側と東側の一部に認められる。天井は、玄室中央部が最も高く約1.1m、奥壁部で約75cmとなる。横断面形はカマボコ状で、奥壁は垂直に立つ、いわゆるアーチ形となる。

遺物(第13図)

埋葬されたと考えられる須恵器・鉄滓・貝殻と自然遺物がある。遺物は、玄室中央部に東西に散在し検出された。須恵器壺は、細かく打ち割られ、鉄滓・貝殻などとともに人骨に混じり床面上から検出される(第11図)。鉄滓は、3~4cmに打ち割られた鉄滓である。貝殻は、殻口の部分が打ち割られたサザエ1点と蓋1点、アナグラ属の貝2点が出土している。

环身(17)は、口径14cm、器高約3.8cmのやや大きいものでゆるく外反する器形で、底面には、しっかりとふんばる高台が付けられ、内外面はヨコナデ、底面はヘラケズリ痕を残す。

自然遺物としては、カタツムリの類(ニホンマイマイ・ノトマイマイ・ヤマタニシ)や食虫目動物の骨、ヘビの類や種類不明の小動物の脊椎骨・肋骨などが多数出土している。

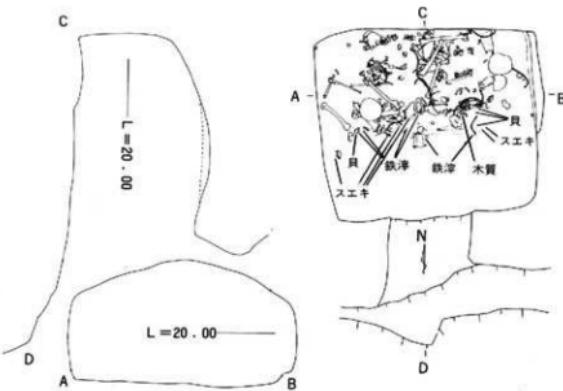
3. 第3号穴(第12図、図版3・7)

第3号は、1・2号の西側約5mに比高差約4mをもち発見された。2号同様すでに開口しており玄室内には、多量の土砂が流入している。3号は、前底部が残り羨門部へつなぐ。羨門部はすでに天井が落ちる。玄室は原形を保ち人骨が、床面からやや浮き上って検出される。状況は、散乱状態。また、2号同様火葬骨が検出される。

遺物は、須恵器环身・鉄刀・金環・貝殻等が出土しており副葬品が多い。

構造

幅約120cm、長さ約40cmで前底部が残る。前底部は、羨門・玄室より一段低く造られ羨門部には、封鎖用の幅約20cm、深さ約10cmのU字状の溝が設けられる。羨門部は幅80cm、長さ40cmで設ける。天井は、すでに落ち



第11図 2号穴実測図 S = 1/40

奥に進むにつれ低くなり床面に統く、いわゆるドーム状となっている。横断面形は、カマボコ状。

遺物 (第13図)

遺物は、入口西側に検出された貝殻3個、土師器2点が原位置に近い状態を保っていると考えられる。しかし、他の遺物は、人骨に混じり玄室内に散乱するが、玄室中央部から西側に多く出土する。

遺物には、鉄刀2、金銅製金具、鏃1、刀子1、金環1、須恵器壊身4、土師器鉢2、貝殻4のはか、自然遺物としてはカタツムリの類、小動物の骨などがある。

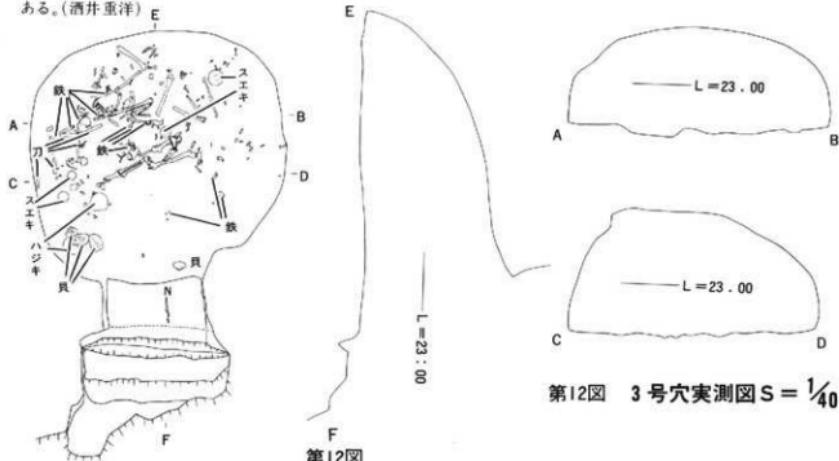
鉄刀は、大身で全長約70cm、幅約3.5cmを測り、金銅製の金具が付けられる1と、細身で全身約60cm (推定)、幅約3cmを測る2~5がある。金銅製の金具 (7~9) は、1の大刀のものと考えられる。7は、幅3.2cm、長さ5.4cmの柄頭。6は、透かしの入った鉄製の鏃。また、出土品には鉄製の小型の口金具がみられ、刀子のものであろうか。金環10は、直径2.3cmの小型で、大刀1に付く鞘の釣り金具の環の部分とほぼ同様の大きさであり、2個1対となる鞘の釣り金具である可能性をもつ。

須恵器は、いづれも壊身で、口縁は薄作りでゆるく外反する。底部は厚く外面にヘラケズリが施される。口径は、やや大きく13cmを測る1と、小形で10~11cmを測る12~14がある。15・16は、土師器の鉢で内外面を丁寧にヘラミガキする。また、15は、内面が黒彩される。

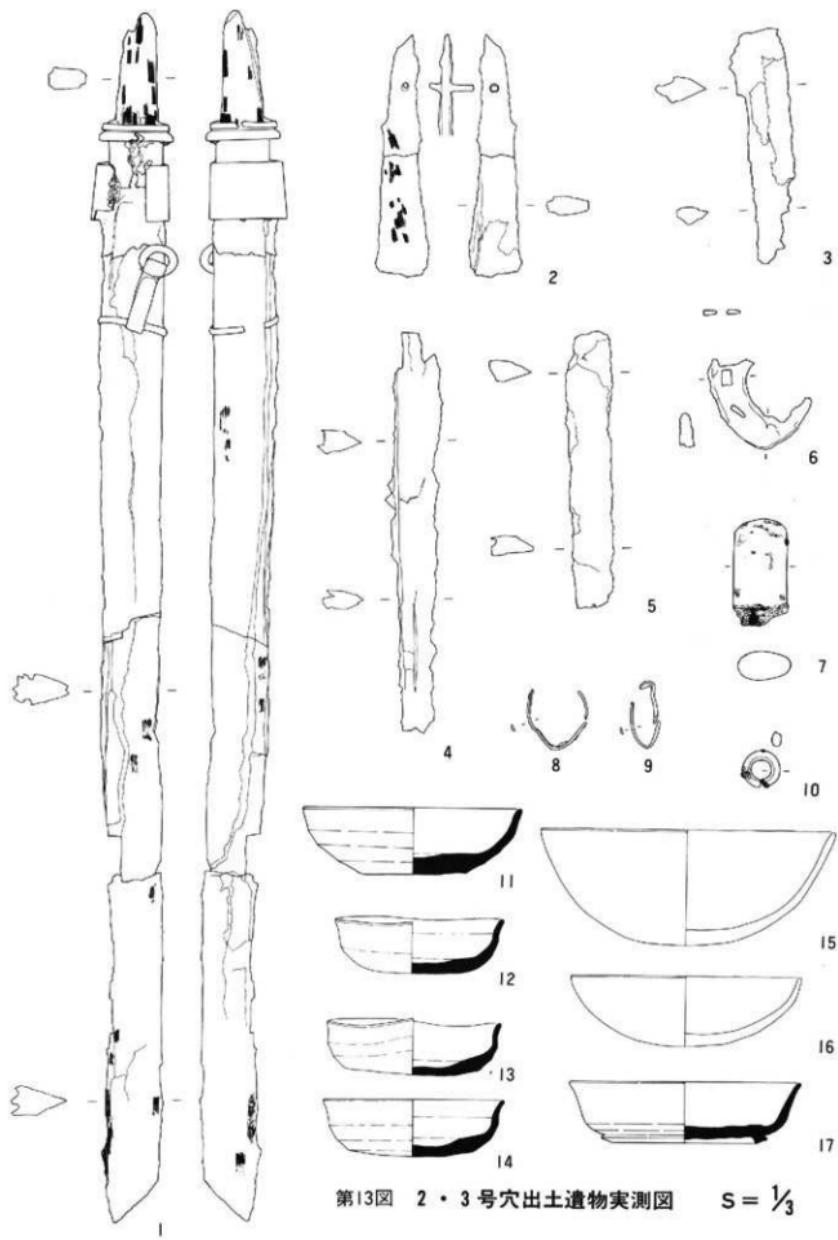
小 結

第2・3号穴からは、それぞれ成人骨2体、火葬骨1体と未成人骨2体、成人骨2体、火葬骨1体が検出されている。火葬骨の検出状況は、2号で西側奥部分の覆土内にやや浮き上った状況、3号では、人骨に混じり床面から出土している。火葬は、仏教とともに伝来した埋葬法であり検出された火葬骨は、いづれも最終的な追葬であろう。追葬は、1号穴が中世墳墓穴として転用されていることから中世の可能性をもつが、中世の遺物は、認められず時代は判然としない。

副葬品には、鉄滓、貝殻がみられる。鉄滓は、2号からの出土である。県下ではすでに小杉周辺や小矢部市、典羽丘陵などで製鉄跡が知られており奈良~平安時代に位置づけられている。今回の発掘で検出された鉄滓は、7C末~8Cごろに氷見市周辺で製鉄が行なわれていたことを示すと考えられる。また、3号からは、金銅製の金具が施された大刀が出土しており、鉄滓の出土と考え併せてこの戸田周辺で、鉄の生産等に關係する一族もしくは工人等の幕群であると推測できよう。また、貝殻の検出は、海岸近くに位置し、生産を営んだ造墓集団の地域性を示しているようである。(酒井重洋)



第12図 3号穴実測図 S = 1/40



第13図 2・3号穴出土遺物実測図 $S = \frac{1}{3}$

V. 蔡田薬師横穴墓群の出土人骨について

富山医科薬科大学医学部第一解剖学教室

森沢 佐 藏

松 田 健 史

はじめに

昭和59年7月中旬～8月中旬に、水見市教育委員会が主体となり、蔡田薬師横穴墓群（所在：富山県水見市蔡田字薬師16、17地内）の発掘を行ない、第1号横穴（中世の石塔群取納）および第2号、第3号横穴（7～8世紀の人工遺物検出）の合計3基の横穴より、いずれも人骨が散乱状態で出土している。そのうち、第1号横穴出土骨は火熱を受けた焼骨であり、第2号、第3号横穴出土骨は火熱を受けない生骨と少量の焼骨とが混在し、出土している。

これらの出土骨は部位など詳細不明な骨または骨片が多いが、第1号～第3号の各横穴出土骨は多数個体の人骨であることが判明している。

なお、人骨の個体数は性や年令に伴う人骨の特徴について、重複する部分骨の比較、左右側の個体識別などにより推定した。また、出土骨には原則として本文中の鉤括弧内に出土番号を記した。

1. 第1号横穴出土人骨

この横穴出土骨は玄室奥で、床面積の約3%から散乱して出土する。出土骨は主な出土地点（石塔・層位）により、以下の①～⑩出土骨および一括出土骨⑪～⑫に分けられる。

- | | |
|----------------------------|-----------------------|
| ①：宝鏡印塔の塔身（B-3）と基礎（B-4）間出土骨 | ⑦：五輪塔（20-3）直下で床面直上出土骨 |
| ②：宝鏡印塔（B-5）直下で間層上部出土骨 | ⑧：五輪塔（31）直下で床面直上出土骨 |
| ③：宝鏡印塔（B-5）直下の間層内出土骨 | ⑨：五輪塔（38）直下で床面直上出土骨 |
| ④：五輪塔（1-2）直下の間層内出土骨 | ⑩：五輪塔（51）直下で床面直上出土骨 |
| ⑤：宝鏡印塔（7-3）直下の間層内出土骨 | ⑪：宝鏡印塔（52）直下の間層内出土骨 |
| ⑥：五輪塔（18-4）直下で床面直上出土骨 | ⑫：一括出土骨 |

a. 出土重量と骨種

出土骨の重量（総重量比）は、①：3 g (0.03%)、②：3 g (0.03%)、③：1,431 g (14.7%)、④：924 g (9.5%)、⑤：485 g (5.0%)、⑥：37 g (0.4%)、⑦：116 g (1.2%)、⑧：56 g (0.6%)、⑨：5 g (0.05%)、⑩：41 g (0.4%)、⑪：1,148 g (11.8%)

表3 出土骨の重量 (単位: g)

分類	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	合計	
大骨片	頭蓋骨	0	0	55	52	35	0	11	1	3	0	130	550	837
	体幹骨	0	0	30	60	5	0	1	0	2	0	12	96	206
	上肢骨	0	0	32	27	25	0	0	1	0	0	35	330	450
	下肢骨	0	0	173	107	20	0	0	4	0	0	305	620	1,229
計	0	0	290	246	85	0	12	6	5	0	482	1,596	2,722	
小骨片	頭蓋骨	0	0	131	100	55	1	2	5	0	1	55	990	1,340
	体幹骨	0	0	50	45	15	1	1	0	0	0	0	255	367
	上肢骨	3	3	410	480	230	0	16	15	0	0	151	2,350	3,658
計	3	3	591	625	300	2	19	20	0	1	206	3,595	5,365	
粉状骨	0	0	550	53	100	35	85	30	0	40	460	270	1,623	
合計	3	3	1,431	924	485	37	116	56	5	41	1,148	5,461	9,710	

出土骨①：体肢骨の小骨片1個で、腸骨翼片と思われる。

出土骨②：体肢骨の小骨片1個で、前腕骨片と思われる。

出土骨③：全身骨格の大骨片(290g)、小骨片(591g)および粉状骨(550g)である。

出土骨④：全身骨格の大骨片(246g)、小骨片(625g)および粉状骨(53g)である。

出土骨⑤：全身骨格の大骨片(85g)、小骨片(300g)および粉状骨(100g)である。

出土骨⑥：頭蓋骨(前頭骨)、体幹骨(肋骨)の小骨片各1個と粉状骨(35g)である。

出土骨⑦：頭蓋骨(頸頂骨)、体幹骨(頸椎)の大骨片(12g)、その他体肢骨を含む小骨片(19g)および粉状骨(85g)である。

出土骨⑧：頭蓋骨(下顎骨)、体幹骨(鎖骨、中足骨)の大骨片(6g)、小骨片(20g)および粉状骨(30g)であり、体幹骨は大・小骨片とともにみられない。

出土骨⑨：頭蓋骨(上顎骨)、体幹骨(腰椎)各1個の大骨片である。

出土骨⑩：頭蓋骨の小骨片1個および粉状骨(40g)である。

出土骨⑪：全身骨格の大骨片(482g)、頭蓋・体幹骨の小骨片(206g)および粉状骨(460g)である。

出土骨⑫：全身骨格の大骨片(1,596g)、小骨片(3,595g)および粉状骨(270g)である。

大骨片(③～⑤、⑦～⑨、⑪および⑫出土骨)の重量は2,722g(28.0%)、小骨片(①～⑩、⑪～⑫出土骨)の重量は5,365g(55.3%)で、粉状骨(③～⑩、⑪～⑫出土骨)の重量は1,623g(16.7%)である。また、5群(③～⑤、⑪および⑫)の各出土骨量は大・小各骨片量、総量とともに他の7群(①、②、⑬～⑭)より多い。

大骨片の骨種

頭蓋骨(837g)として、後頭骨、蝶形骨、側頭骨、頭頂骨、前頭骨、鼻骨、上顎骨、頰骨、下顎骨の9種の大骨片と脱落歯40個が出土し(③～⑫、⑦～⑨、⑪～⑫)、齒竹、下鼻甲介、涙竹、鶴骨、口蓋竹、舌骨はみあたらない。

体幹骨(206g)として、頸椎(③ ④ ⑤ ⑦ ⑪ ⑫)、胸椎(③ ④ ⑫)、腰椎(④ ⑤ ⑨ ⑫)、仙椎(④ ⑫)および肋骨(④ ⑪ ⑫)の5種が出土し、尾椎、胸骨はみあたらない。

上肢骨(450g)として、肩甲骨(③ ④ ⑪ ⑫)、鎖骨(③ ④ ⑤ ⑧ ⑫)、上腕骨(③ ⑤ ⑪)、桡骨(③ ④ ⑫)、尺骨(④ ⑤ ⑫)、手根骨(③ ⑫)、中手骨(③ ⑫)、指節骨(③ ⑪ ⑫)の8種がすべて出土している。

下肢骨(1,229g)として、寛骨(③ ④ ⑫)、大腿骨(③ ⑪ ⑫)、胫骨(④ ⑪ ⑫)、腓骨(⑪ ⑫)、膝蓋骨(④ ⑤ ⑫)、足根骨(⑫)、中足骨(③ ④ ⑧ ⑫)の7種が出土し、指節骨はみあたらない。

③～⑤、⑦～⑨、⑪出土骨の骨種はすべて一括出土骨(⑫)より出土している。

小骨片の骨種

頭蓋骨1,340g、体幹骨367g、体肢骨3,659gであるが、部位は同定できない。

大骨片および小骨片はすべて人骨のほか全身骨格の部分骨である。これらの骨片はすべて焼骨である。骨の色調は白色、灰白色または黒色であり、骨質は硬く、その破縁は鋭利である。

粉状骨は粒状小塊で、骨種、部位とも同定できないが、人の全身骨格の細片で、色調は灰白色である。

b、出土骨の観察個数

人骨片は、③～⑤、⑦～⑨、⑪および⑫出土竹にみられ、骨種と部位が同定できるので、各骨に分類し、さらに同一部位を包含する部位に区分して、最少の個体数の確認作業を行なった。しかし、破壊は锐利であるが、火熱による変形もあり、連結しえなかつたので、頭蓋骨、体幹骨、上肢骨、下肢骨に大別し、個々の骨について観察した。以下、頭蓋骨の主な部位の観察個数と出土地点を記し、③～⑤、⑦～⑨、⑪出土骨の観察個数が各1個で、その他は括出土骨⑫で観察される場合には出土骨別の観察個数は省略した。

頭蓋骨

- (a)後頭骨 1)底部：3個（⑪ ⑫）、2)外側部で舌下神経管を含む部位：2個（③ ⑫）、3)後頭鱗中央部で外後頭隆起を含む部位：7個（⑪ ⑫）、4)後頭鱗上端でラムダを含む部位：2個（⑪ ⑫）。
- (b)蝶形骨 1)蝶形骨体：2個（⑫）、2)人鼻基部で頭蓋底を構成し、卵円孔を含む部位：右1個（⑫）、左3個（④ ⑤ ⑫）。
- (c)側頭骨 1)錐体乳突部で内耳孔を含む部位：右6個（③ ⑤ ⑫）、左7個（③ ⑤ ⑪ ⑫）、2)側頭鱗部で頸骨突起を含む部位：右6個（③ ④ ⑤ ⑫）、左5個（③ ⑤ ⑪ ⑫）。
- (d)顎頂骨 1)前頭角：右2個（⑫）、左1個（⑫）、2)乳突角：右3個（③ ⑫）、左3個（④ ⑦ ⑫）。
- (e)前頭骨 1)前頭鱗頸骨突起部：右4個（③ ④ ⑤ ⑫）、左4個（③ ⑫）、2)鼻部：3個（③ ⑫）。
- (f)鼻骨 1)上縁：左2個（⑫）。
- (g)上顎骨 1)上顎体で梨状口緑を含む部位：右4個（④ ⑫）、左2個（③ ⑫）、2)前頭突起：右4個（③ ④ ⑫）、左2個（① ⑫）、3)歯槽突起：右4個（④ ⑤ ⑫）、左2個（③ ⑫）。
- (h)頬骨 1)前頭突起：右3個（③ ⑫）、左6個（③ ① ⑤ ⑫）、2)上顎突起：左1個（④）。
- (i)下顎骨 1)下顎枝下顎頸部：右5個（③ ⑫）、左4個（⑤ ⑫）、2)下顎枝筋突起：右4個（⑫）、左5個（⑧ ⑫）、3)下顎体正中歯槽部：5個（③ ⑦ ⑫）。
- (j)脱落歯 1)乳歯歯冠：4個（⑫：a, b, c, d）、2)永久歯歯冠：7個（④：f, ⑪：3, 4, 14, 2, 7, 17）、3)歯根で1根のもの：16個（③：5個、⑤：1個、⑫：10個）、4)歯根で2根のもの：8個（③：1個、⑤：4個、⑫：3個）、5)歯根で3根のもの：5個（③：1個、⑤：2個、⑫：2個）。

頭蓋骨では、後頭骨の後頭鱗中央部（a - 3）、左側頭骨の錐体乳突部（c - 1）：各7個、右側頭骨の錐体乳突部（c - 1）、左頸骨の前頭突起（h - 1）：各6個などが多く観察される。

体幹骨では、第一頸椎の外側塊：右5個（③ ⑤ ⑫）、第二頸椎の歯突起：3個（⑦ ⑪ ⑫）などが多い。

上肢骨では、左尺骨の尺骨粗面を含む部位：5個（④ ⑫）、左肩甲骨の肩甲棘：4個（③ ⑪ ⑫）などが多い。

下肢骨では、左寛骨の腸骨翼で大坐骨切痕を含む部位：3個（③ ⑫）、右大腿骨の骨体で恥骨筋線を含む部位：3個（⑫）、右膝蓋骨の関節面で後線を含む部位：3個（⑫）、左足根骨で内側楔状骨：3個（⑫）などが多い。

頭蓋骨、体幹骨、上肢骨、下肢骨の観察個数より、個体数は最少限7個体ある。

C. 人骨所見

①、②、⑥、⑩出土骨は少量の小骨片、粉状骨であるので、各出土骨の性別、年令は不明である。以下、③～⑤、⑦～⑨、⑪出土骨について、頭蓋骨、体幹骨、上肢骨、下肢骨の順に主として年令、性別に関する所見を述べる。

出土骨③：頭蓋骨の内板、外板は薄い。冠状縫合の外板は癒着を認めないが、内板では完了している。側頭骨の錐体乳突部、側頭鱗部、前頭骨の頸骨突起部、頸骨の前頭突起は左右の骨片に分かれ出土するが、左右の形態はほぼ類似し、いずれもきしゃやである。下顎骨は低く（オトガイ高：30mm）、オトガイ孔は下のほぼ中央の高さに位置する。オトガイ棘、頸舌骨筋線は弱い。歯槽部（4～11、14～17部）のうち、4部、5部、14部～17部の歯槽は閉鎖、

萎縮している。胸椎、腰椎の椎体、上・下関節突起面の各辺縁には鈎状の骨増殖がみられる。橈骨頭、手の指節骨底は各々体部と完全癒合している。橈骨頭左は細い（頭周：34mm）。大腿骨粗線はやや強い。この出土骨には熟年女性骨の特徴が多くみられる。

出土骨④：脳頭蓋骨の内板・外板は厚い。冠状縫合の外板は接着を認めないが、内板では完了している。前頭骨の眉間、眉弓の膨隆は強い。頬骨左は大きい（最大幅：54mm、最大高：49mm）。側頭骨右には乳突鱗状縫合の痕跡が認められ、その頭頂切痕には小鍛合孔1個がみられる。脱落歯として、上顎左第一大臼歯1個が出上し、その咬耗度はMartinの2度である。橈骨遠位端左、第二中足骨底左右は各々体部と完全癒合している。橈骨左、尺骨左の各粗面は広く、粗造である。上肢骨、下肢骨の緻密質は厚く、頑丈である。この出土骨は熟年男性骨と思われる。

出土骨⑤：脳頭蓋骨の内板・外板は薄い。前頭骨眉弓の膨隆は弱い。上顎骨の齒突起左右には乳歯と永久歯の齒槽がみられる。鎖骨左の肩峰端は細く、肩甲骨右の肩甲棘基部は薄い。膝蓋骨左は小さい。この出土骨には未成人骨の特徴が多くみられ、性別は不明である。

出土骨⑦：頭頂骨左の乳突角部、第二頸椎の歯突起、下顎骨の舌側歯槽部は、いずれも成人骨と思われ、性別不明である。

出土骨⑧：下顎骨の筋突起左、第一中足骨体左は、いずれも成人骨と思われ、性別不明である。

出土骨⑨：上顎骨左の歯槽突起、腰椎の上関節突起はいずれも成人骨と思われ、性別不明である。

出土骨⑪：脳頭蓋骨の内・外板は厚い。冠状・矢状・ラムグ縫合の内板は接着完了し、それらの外板も縫合の約半分接着している（Martinの2度）。後頭骨の上頂線は強いか、外後頭隆起の膨隆は特に弱い（Brocaの0度）。側頭骨左の錐体乳突部は大きく、頑丈である。第二頸椎の歯突起は大きい。腰椎体、肋骨頭の辺縁には鈎状の骨増殖がみられる。肩甲骨の肩甲棘基部は左右とも厚く、頑丈である。上腕骨左の骨幹（中央周：65mm）、橈骨左の骨幹（最小周：42mm）は太い。手の指節骨底は体部と接着完了している。大腿骨左の骨幹（中央周：約90mm）、胫骨左の骨幹（中央周：82mm、最小周：76mm）は太い。この出土骨は熟年男性骨と思われる。

一括出土骨（⑩）には後頭骨の後頭鱗中央部は6個（外後頭隆起の膨隆度がBrocaの1度のもの4個、Brocaの0度のもの2個）あり、そのうち3個の後頭鱗の内・外板は薄い。ほぼ完全な下顎骨1個は大きく、頑丈である（計測値は表4に一括する）。脱落歯のうち、乳歯4個（a）、b）、c）、d））は歯冠の磨耗と歯根の吸収を認める。

また、永久歯6個のうち、1個（e））は歯冠のみで、咬耗がみられない。1個（f））の歯冠咬耗はわずかであり、他の4個（g）、h）、i）、j））の歯冠咬耗はやや強い（Martinの2度）。以上の所見から、第1号横穴出土人骨の年令・性別構成は、性別不明な少年期骨1個体（⑤）、性別不明な青年期骨2個体（出土地点不明）、熟年男性骨2個体（④⑪）、熟年女性骨1個体（③）および性別不明な成人骨1個体（出土地点不明）と思われる。

2. 第2号横穴出土人骨

この出土人骨は玄室の奥壁近くの床面より出土している（第14図）。各人骨は散乱状態で出土しており、人骨の出土状態から頭位・体位は不明である。

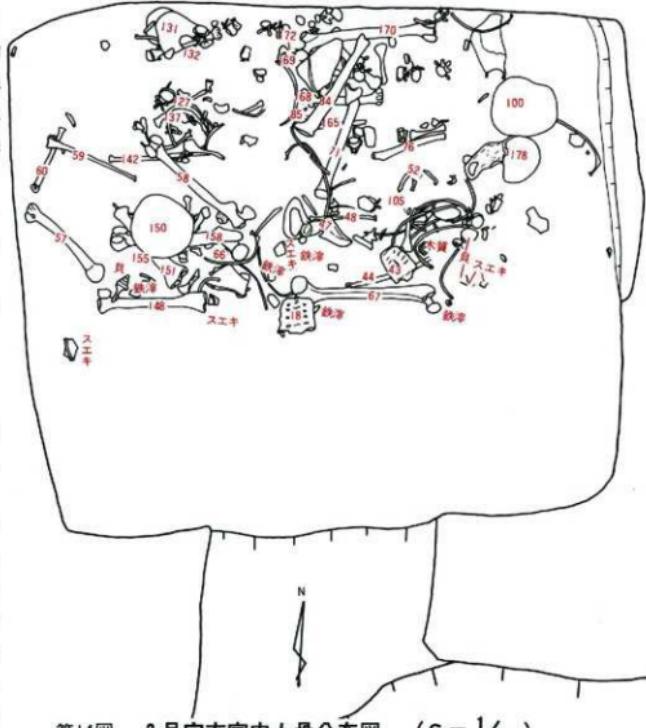
出土人骨の骨種と観察個数を列記すると、頭蓋・下顎骨・環椎・軸椎（各2個）、第三～第七頸椎（3個）、第一～第十二胸椎（19個）、第一～第五腰椎（10個）、仙骨（2個）、第一～第十二肋骨（右：20個、左：15個）、脚骨（1個）、肩甲骨・鎖骨・上腕骨・橈骨・尺骨（右：各2個）、第二中手骨（右：1個、左：2個）、第三中手骨（左：1個）、第四中手骨（右、左：各1個）、基節骨（3個）、寛骨（右1個、左2個）、大腿骨・胫骨・腓骨（右、左：各2個）、膝蓋骨（右：1個、左：2個）、距骨・踵骨（右、左：各2個）、舟状骨（右：2個、左：1個）、立方骨（左：1個）、第一中足骨・第二中足骨（右：各1個）、第三中足骨（右：2個、左：1個）、第四中足骨・第五中足骨（右、左：各1個）、基節骨（1個）である。これらの人骨の色調は黄褐色～褐色である。焼骨については人骨所見の終りに述べる。

人骨所見

頭蓋、下頸骨、仙骨、上腕骨、寛骨、大臍骨の順に所見を述べる。ただし、左右側のある骨の形態はほぼ類似しているので、原則として左を記載する（表4）。

頭蓋は2個〔100、150〕出土している。頭蓋〔100〕は頭蓋冠である。骨質は厚い。頭蓋縫合の外板は冠状・矢状・ラムダ縫合とも一部癒着し（癒着度：Martinの1度、3度、1度）、内板は三縫合とも癒着完了している。上面観は類五角形で、頭蓋長幅示数は約83.1の短頭型である。頭頂結節は強い。長耳ブレグマ高示数は約60.5の中頭型である。前頭輪郭線は全体として中等度の弯曲である。眉弓は強く膨隆する。頭頂輪郭線は後半より前半で強く弯曲している。ラムダ前圧痕がみられる。上項線は強い。後面観は家形である。後頭骨の最上・上・下項線はいずれも強い。外後頭結節は強く膨隆する（Brocaの2度）。頭蓋〔150〕は頭蓋冠の左半分（後頭骨、蝶形骨、側頭骨、頭頂骨、前頭骨、頬骨）と、右の側頭骨・頬骨・上顎骨および歯骨、脱落歯2個〔4、6〕である。冠状・ラムダ縫合の内・外板とともに癒着を認めない。縫合骨はブテリオン部左に大小各1ヶ、頭頂切痕部に小1ヶある。後頭骨の最上・上・下項線はいずれも弱い。外後頭結節は弱い（Brocaの1度）。側頭骨の乳様突起は狭く（基部前後径：約21mm）、その影隆は弱い。乳突上溝は浅い。外耳孔右は円形である。側頭窩の上面観は長卵円形で、狭い（前後径：38mm、幅径：25mm）。側頭骨の頬骨突起は短く、薄く波状である。頬骨は小さく（高径：44mm、幅径：48mm）、縁結節は弱い。永久歯2個は強く咬耗し（Martinの2度）、そのうち1個〔6〕の近心側歯頚部にはう蝕が認められる。

下頸骨は2個〔52、137〕出土している。下頸骨〔52〕は下頸体、左右の下頸枝に分離出土している。下頸枝切痕右は狭い（切痕高：14.7mm、切痕幅：31mm）。筋突起先端は鋭い。下頸頭右は細長い（前後径：9.5mm、幅径：22mm）。下頸体は下顎底のみであるが、顎下腺窓は深い。また、脱落歯として、永久歯は6個〔2、1、1、2、3、6〕あり、いずれも強く咬耗し（Martinの2度～3度）、1個〔2〕の歯頚部には歯石がみられる。下頸骨〔137〕は左右の下頸枝・体に分離出土している。下頸枝右は広く、低い（最小枝幅：36.4mm、最小枝高：46.2mm）。顎舌骨筋線は弱い。



第14図 2号穴玄室内人骨分布図 ($S = 1/15$)

仙骨は2個〔18、43〕出土する。仙骨〔18〕の仙骨底は狭い（基底最大幅：約48mm）。仙骨前面の弯曲が強い。仙骨〔43〕の仙骨底は広く（基底最大幅：53.5mm）、仙骨翼幅は狭い（前上直幅：98mm）。仙骨の前面の弯曲は弱く、細長い（長幅示数：93.3）。

上腕骨右は2個〔132、169〕出土している。上腕骨右〔132〕は短い（最大長：280mm）。上腕骨頭は小さく（頭最大矢状径：42.8mm）、上腕骨頸は小さい（滑車及び小頭幅：40.5mm）。三角筋粗面は比較的滑らかである。上腕骨右〔169〕は長い（最大長：307mm）。近位・遠位骨端は大きい。小結節は大きい。大結節後、三角筋粗面は粗造である。

寛骨は2個〔47、131〕出土している。寛骨〔47〕は大きい（骨盤高：211mm、寛骨深：134mm、腸骨幅：145mm）。大坐骨切痕は狭い（切痕最大幅：48mm、切痕長：42mm）。坐骨結節は強い。閉鎖孔は鈍円三角形である。恥骨下枝は太く、直線である。寛骨臼は大きい（最大径：58mm）。寛骨〔131〕は低い（骨盤高：197mm）。大坐骨切痕は広い（切痕最大幅：61mm、切痕長：38mm）。坐骨結節は弱い。寛骨臼は小さい（最大径：54mm）。

大腿骨右は2個〔58、170〕出土している。大腿骨右〔58〕は短い（最大長：約381mm）。骨幹は細い（中央周：81mm）。粗線は弱く、骨幹中央は前後に扁平である。上骨幹横断示数は69.6の超広型である。殿筋粗面は粗造でなく、小丘状の第二転子を形成する。転子下窩は浅い。大・小転子は小さい。大腿骨頭は小さい。内転筋結節は弱い。大腿骨右〔170〕は長い（最大長：421mm）。骨幹は太い（中央周：89mm）。粗線は強い。上骨幹横断示数は78.3の広型である。殿筋粗面は粗造である。大・小転子は大きい。大尾骨頭は大きく、大腿骨頭の前上方には舌状の関節面の延長がみられる。

第2号横穴人骨群の年令構成について、頭蓋縫合の癒着、永久歯の磨耗から、性別について骨の大きさ、筋付着部の形状、乳様突起の大きさ、肩弓・外後頭結節の膨隆、仙骨の形態、寛骨の大坐骨切痕などから判断すると、熟年男性骨1個体と熟年女性骨1個体の合計2個体と推定する。

第2号横穴出土の焼骨について、玄室奥の西側床面より、頭蓋骨（頭頂骨）、上肢骨（肩甲骨）、下肢骨（大腿骨？）の骨片が合計7個（40g）と一括出土骨（400g）として側頭骨左の内耳孔を含む錐体、環椎の外側塊左など出土している。この人焼骨は別個体の熟年男性骨1個体と推定する。

3. 第3号横穴出土人骨

この出土人骨は床面全域に分布している（第15図）。床面のはば中央部には左側の上腕骨、尺骨、桡骨が生理的自然位を保って出土し（伸展位）、後面を床面側、前面を表層にし、遠位端をほぼ北東に向いているが、その他の人骨は散乱状態で出土しており、頭位、体位は不明である。

出土人骨の骨種と観察個数を列記すると、頭蓋片（数十片）、下顎骨（3個）、環椎・軸椎（各1個）、第三～第七頸椎（2個）、第一～第十二胸椎（3個）、第一～第五腰椎（2個）、仙骨・尾椎（各1個）、第一～第十二肋骨（右：4個、左：9個）、胸骨（1個）、肩甲骨（右：1個、左：2個）、鎖骨（右：2個、左：1個）、上腕骨（右：2個、左：3個）、桡骨（右：1個、左：2個）、尺骨（右：3個、左：2個）、舟状骨・小菱形骨、有鈎骨、第一中手骨（左：各1個）、第二中手骨（左：2個）、第四中手骨・第五中手骨（右：各1個）、基節骨（5個）、中節骨（3個）、寛骨（右、左：各2個）、大腿骨（右：4個、左：3個）、胫骨（右、左：各2個）、腓骨、距骨（右、左：各1個）、蹠骨（右：3個、左：1個）、舟状骨（右：1個、左：2個）、内側楔状骨・立方骨（右：各1個）、第一中足骨（左：1個）、第二中足骨（右：1個）、第三中足骨（右：1個、左：2個）、第四・第五中足骨（右：各1個）、基節骨（3個）である。これらの入骨の色調は黄褐色～褐色である。焼骨については人骨所見の終りに述べる。

人骨所見

頭蓋片は数十片〔54、91、184〕出土している。頭蓋片〔54、91、184〕はいずれも脳頭蓋の一部であり、内板の大部分腐蝕消失している。頭蓋片〔54〕は頭頂骨左側縫合を含む部位と思われ、頭蓋片〔91〕は脳頭蓋の一部であり、いずれも緻密質が厚い。頭蓋片〔184〕は頭頂骨左右と後頭鱗であり、緻密質がとくに薄い。矢状・ラムダの両縫合の

焼着はみられない。

下顎骨は3個〔91、166、183〕出土している。下顎骨〔91〕は頭蓋片〔91〕と共に出土し、¹部～⁴部のおもに歯槽下の下顎体を残存している。³部、⁴部の歯槽中より、歯はすべて脱落している。また脱落歯として、永久歯1個（？）が出土し、その歯冠の咬耗は強い（Martinの3度）。下顎骨〔166〕はほぼ完全に出土する。下顎体は高く、厚い（オトガイ孔部における下顎体高左：31mm、同下顎体厚左：16mm）。歯槽上線と下顎底線とはほぼ平行である。オトガイ孔は⁴部または⁴・⁵部間の下部で、下顎体のはば中央の高さに位置する。顎下腺窩は深い。左右の小白歯舌側には小さな下顎隆起が各2個みられる。筋突起左は高く（筋突起高：68mm）、その先端は鳥帽子形である。歯槽中には永久歯5個（⁷、⁶、⁵、⁷、⁸）あり、その歯冠の咬耗は強い（Martinの1度～2度）。下顎骨〔183〕¹は下顎体正中部および下顎枝左である。下顎結合は下顎体（オトガイ高：20.4mm）の約半分の舌側歯槽部にみられる。下顎枝は小さく（枝高：47.2mm、最小枝高：36.8mm）、下顎枝は後方へ強く傾斜している（下顎枝角：130度）。歯槽中には永久歯3個（¹、¹、⁶）と乳歯1個（⁶）があり、左第二乳臼歯および左第一大臼歯の歯冠は咬耗している（Martinの1～2度）。



第15図 3号穴玄室内人骨分布図 (S = 1/15)

仙骨は1個〔182〕出土する。仙骨底は広く（基底最大幅：55mm）、仙骨翼幅は広い（前上直幅：112mm）。仙骨は高く（前面長：110mm）、細長い。仙骨前面の弯曲は弱い。

上腕骨は3個〔14、60、165〕出土している。上腕骨〔60〕は遠位約1/2の骨幹と骨端であり、骨幹はとくに太く（最小周：78mm）、上腕骨頭も巨大である（滑車及び小頭幅：53mm）。この上腕骨とともに出土の尺骨左〔65〕、桡骨左〔66〕はいずれも頑丈である（尺骨生理的長：227mm、尺骨周：47mm、桡骨最大長：232mm以上、最小周：48mm）。上腕骨〔165〕は近位骨端と大部分の骨幹であり、上腕骨頭は小さいようであるが（頭最大矢状径：44mm）、骨幹は太い（最小周：69mm）。三角筋粗面は広く、粗面中央には遠位方向の凹部がみられる。上腕骨〔14〕は骨幹の中央部を含む約1/2であり、骨幹はとくに細い（最小周：59mm）。

寛骨は2個〔2、112〕である。寛骨〔112〕は寛骨臼を含む腸竹翼の一部であり、腸骨結節および前筋筋線は強い。寛骨〔2〕は腸骨翼の一部であり、腸竹翼はとくに薄く、腸骨核は遊離している。

大腿骨右は4個〔104、105、172、181〕出土している。大腿骨右〔104〕は近位骨幹約1/2の前面であり、骨幹の後面および向竹端の観察はできない。この大腿骨は骨幹の上部、中央部の横径がとともに大きい（中央横径：30.0mm、骨幹上横径：33.5mm）。大腿骨右〔172〕は骨幹と遠位骨端の一部である。この大腿骨は骨幹は太く（中央周：91mm）、粗線の発達は強い（骨幹中央横断示数：108.1）。上骨幹横断示数は77.7の広型である。筋筋粗面には小丘状の第三軸子を形成する。転子下窩は広く、深い。大腿骨右〔105〕は近位骨幹約1/2であり、骨幹は細い（中央周：74mm）。粗線は比較的強い（骨幹中央横断示数：111.4）。大腿骨右〔181〕はほぼ完全な骨幹であり、向竹端は骨幹より遊離している。この大腿骨はとくに短く（骨幹長：21.8mm）、細い（骨幹中央周：49mm）。

第3号横穴出土人骨のうち、人腿骨右は4体分あり、この人骨群の年令構成は体肢骨の竹端の癒着、不動連結部の癒着、歯の出現、萌出、磨耗から、性別は推定年令に相当する骨の大きさ、筋付着部の形態からみて、老年男性骨2個体、性別不明な青年期骨、少年期骨各1個体と推定する。

第3号横穴出土の焼骨について、西壁および北壁近くの床面より、体肢骨片が2個（10g）と、一括出土竹（45g）として側頭骨左の内耳孔を含む類体など出土する。別個体の成人骨1個体と推定されるが、出土骨の性別等は不明である。

おわりに

富山県氷見市戸田墓地横穴墓群のうち、第1号、第2号、第3号横穴出土の散乱人骨について、おもに個体数を検討したので、以下にまとめる。なお、第1号横穴出土竹はすべて人焼骨であり、第2号、第3号横穴から少量の人焼骨が火熱を受けない人骨とともに出土している。これらの人焼骨は大骨片（骨種と部位の同定可能）、小骨片（骨種の同定可能）、粉状骨（骨種、部位とも不明）とに分類し、おもに大骨片の形態を観察した。

(1) 第1号横穴出土人焼骨の総重量は9,710gである。そのうち、竹種の判明する大・小骨片は83.3%（頭蓋骨：22.4%、体幹骨：5.9%、体肢骨：55.0%）である。また部位の判明する大骨片は28.0%（頭蓋骨：8.6%、体幹骨：2.1%、上肢骨：4.6%、下肢骨12.7%）である。

(2) 第1号横穴出土人焼骨の個体数は同一部位の観察例数から最少限7個体ある。また、各骨の同一部位はいずれも異なる地点より出土している。

(3) 第1号横穴出土人焼骨の年令構成および性別は出土骨量の多い4群の各人骨所見を総合すると、宝塚印塔（B-5）直下の出土人焼骨は老年女性骨、五輪塔（1-2）直下の出土人焼骨は老年男性骨、宝塚印塔（7-3）直下の出土人焼骨は性別不明な未成人骨（少年期骨と思われる）、宝塚印塔（52）直下の出土人焼骨は老年男性骨で、合計4個体と推定する。主に一括出土人焼骨および他の7地点出土人焼骨の所見より、その他の3個体の年令および性別は、性別不明な未成人骨（青年期）2個体と成人骨1個体で、いずれも出土地点は不明である。

(4) 第2号横穴出土人骨は、老年男性骨1個体と、老年女性骨1個体の合計2個体と推定する。また、同横穴出土の

表4 萩田素師横穴墓群(第1号、第2号、第3号)出土人骨計測値表: 単位はmm又は度

(1) 頭 骨

計測項目	横穴-地点	2-100
頭蓋最大長	[1]	(177)
グラベロ・イニオン長[2]	174	
グラベロ・ラムダ長[3]	168	
頭蓋最大幅[8]	147	
最小前頭幅[9]	86	
耳・ブレグマ高[20]	107	
頭蓋水平周[23]	515	
横弧長[24]	312	
正中矢状弧長[25]	(353)	
頭蓋長幅示数[%]	(83.1)	
長耳ブレグマ高示数[%]	(60.5)	
輪耳ブレグマ高示数[%]	72.8	

(2) 下顎骨

計測項目	横穴-地点	1-12	2-52	2-137	3-166	3-183
筋突起幅	[65(1)]	99.9	-	-	98.7	-
下顎角幅	[66]	104.1	-	-	-	-
前下顎輪幅	[67]	51.8	-	-	46.7	-
下顎長	[68]	102	-	-	-	-
オトガイ高	[69]	31.6	-	-	-	20.4
下顎体高	[69(1)]	29.0	-	-	31.0	22.5
下顎体厚	[69(3)]	12.4	-	-	16.0	11.1
下顎枝高	[70]	66.7	-	-	-	47.2
筋突起高	[70(1)]	62.2	-	53.8	68	-
最小枝高	[70(2)]	49.7	-	46.2	-	36.8
最小枝輪幅	[7/a]	36.2	39.0	36.4	-	(28.0)
下顎頭前後径	-	-	9.5	-	-	7.1
下顎頭幅径	-	-	22.2	-	-	27.2

(3) 仙 骨

計測項目	横穴-地点	2-18	2-43	3-182
仙骨弧長	[1]	(110)	(110)	120
前直長	[2]	(98)	(105)	110
前上直幅	[5]	(107)	98	(112)
仙骨基底最大幅	[19]	(48)	54	55
仙骨長幅示数[%]	(109.2)(93.3)	(101.8)		

(4) 上腕骨

計測項目	横穴-地点	2-132	2-169	2-57	2-168	3-169	3-60	3-165
上腕骨最大長	[1]	右 280	左 307	(271)	-	右 -	左 -	-
上端幅	[3]	-	49.1	-	-	-	-	(47.2)
骨幹最小周	[7]	-	-	62	62	68	(78)	69
骨幹中央周	[7a]	(68)	-	68	-	83	-	81
頭最大矢状径	[10]	43	46	-	46	-	-	44
滑車及び小頭幅	[12a]	40.5	47.1	40.0	-	(53.0)	-	-
滑車深	[13]	(24)	(25)	25	-	-	-	-

(5) 寬 骨

計測項目	横穴-地点	2-47	2-131
骨盤高	[1]	左 211	(197)
寛骨深	[4]	134	-
豎脊高	[9]	130	123
豎脊幅	[12]	(145)	(152)
豎脊臼恥骨結合部	[14]	120	-
坐骨高	[15]	84	(77)
寛骨最大径	[22]	58	54
半骨切痕最大幅	[31]	48	61
坐骨切底高(長)	[32]	42	38
坐骨切痕示数[%]	[32]	87.5	62.3

(6) 大腿骨

計測項目	横穴-地点	2-58	2-170	2-67	2-158	3-104	3-105	3-172	3-181	3-64	3-105	3-188
大腿骨最大長	[1]	右 (381)	左 421	-	-	右 -	左 -	-	-	左 -	-	-
骨幹中央矢状径	[6]	23.5	27.8	(26.5)	-	-	(24.5)	29.3	(15.5)	32.4	-	30.0
骨幹中央横径	[7]	27.2	28.0	(27.0)	-	30.0	(22.0)	27.1	-	32.0	-	25.5
骨幹中央周	[8]	81	89	-	-	-	(74)	91	49	99	-	88
骨幹上横径	[9]	33.5	32.3	-	(35.0)	33.5	(27.5)	31.9	18.5	37.0	-	(30.1)
骨幹上矢状径	[10]	23.3	25.3	-	(24.0)	-	-	24.8	17.4	25.5	(17.5)	(24.5)
骨幹中央横断示数[%]	[9]	86.4	99.3	(98.1)	-	-	(111.4)	108.1	-	101.3	-	117.6
上骨幹横断示数[%]	[9]	69.6	78.3	-	(68.6)	-	-	77.7	94.1	68.9	-	(81.4)

人焼骨（総重量440g）は別個体の成人骨（老年男性骨）1個体と思われる。

(5)第3号横穴出土人骨は老年男性骨2個体、性別不明な未成人骨2個体（少年期骨1個体、青年期骨1個体）の合計4個体と推定する。また、同横穴出土人焼骨（総重量55g）は別個体の成人骨最少限1個体と思われる。

(6)蔽田薬師横穴第2号人の身長は男性の大脛骨最大長（右）よりピアソンの身長式（男性）から約160.4cm、女性の大脛骨最大長（右）よりピアソンの身長式（女性）から約146.9cmと推定する。

参考文献

- (1)城一郎：古墳時代日本人人骨の人類学的研究、人類学報 1: 1~334、1938。
- (2)Martin.R. & Saller,K.: Lehrbuch der Anthropologie, Bd. 1-2, 429-597, 1005-1477, Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.
- (3)岡本恭一：蔽田薬師中世墓の発掘調査、富山県埋蔵文化財センター所報 第9号、2p、1985。
- (4)松田健史：石川県鶴来町一閑院近郊より出土せる家形石棺内人骨の形質人類学的研究、金沢大学医学部解剖学教室業績 第62冊、159~190、1960。
- (5)松田健史：福井県福井市足羽公園より出土せる舟型石棺内人骨の形質人類学的研究、同上誌 第62冊、191~225、1960。
- (6)松田健史、森沢佐歳 他：一見古代人骨観を呈する白骨の鑑定例、法医学の実際と研究 23: 81~100、1980。
- (7)森沢佐歳：日本古墳人頭蓋形質の地方差について、新潟医会誌 90: 32~47、1976。
- (8)森沢佐歳 松田健史 他：北陸日本人下顎骨の年齢差について—20才代、30才代、40才代の比較—、人類誌89: 439~456、1981。
- (9)森沢佐歳：北陸日本人下顎骨の男女差について、新潟医会誌 95: 669~675、1981。
- (10)森沢佐歳、松田健史：頭川城ヶ平横穴墓群及び頭川古墓出土人骨について、頭川城ヶ平横穴墓群（第1次緊急発掘調査概要）、10~14、高岡市教育委員会、富山、1983。
- (11)森沢佐歳、松田健史：頭川城ヶ平横穴墓群出土人骨について、頭川城ヶ平横穴墓群（第II次発掘調査報告）、19~31、高岡市教育委員会、富山、1984。
- (12)松田健史、森沢佐歳：福井市西谷山2号墳2号石棺内出土人骨について、西谷山古墳群、32~54、福井県教育庁、福井、1984。

VI. まとめ

前章まで述べたことと、問題点を要約しまとめとする。

1. 蔵田薬師横穴墓群は、標高68m余りの薬師山より富山湾に向って舌状に突き出た石灰質泥岩で構成された丘陵の海岸部から、約300m山側に入った南面する急傾斜面の標高18.5m～22.5mの間に位置し、発見された3基の他に未発見の横穴の存在が考えられる。
2. 1号穴は標高18.5mに位置し、ほぼ真南を向く。長方形を基調とした床面は2段に掘り凹められ、奥壁は垂直に立つが、天井部が急角度に立ち上がるため、床面の約半分しか覆っていない。出土遺物は五輪塔構成部分47個（うち完成塔として復元できるもの3基）、宝匣印塔3基、板石塔婆12基、一石一尊仏1基、土師質小皿60点余り、銅鏡13枚、釘2本の他、最少限7個体確認できる多量の火葬骨が出土している。自然遺物としては、カタツムリの殻が在る。造営の時期は、15世紀の前半過ぎから15世紀～一杯と考える。
3. 2号穴は標高19.5mに位置し、ほぼ真南を向く。床面は方形で横断面はカマボコ状を呈し、奥壁は垂直に立ち上がるいわゆるアーチ形である。出土遺物は、刷毛されたと考えられる細かく打ち削られた須恵器片10点、3～4cmに打ち削られた鉄鋤8点とサザエなどの貝類の他、2個体の人骨と1個体の火葬骨が出土している。自然遺物としてカタツムリの殻や種類不明の小動物の骨などが出土している。築造年代は7世紀末～8世紀前半と考えられる。
4. 3号穴は標高22.5mに位置し、ほぼ真南を向く。床面は楕円形で、横断面はカマボコ状、天井部は奥にいくにつれ低くなり床面に統一感のあるドーム状を呈する。出土遺物は鉄刀2本、金銅製金具数点、錐1点、刀子1本、金環1点、須恵器片4点、土師器鉢2点、貝殻4点の他、4個体の人骨と1個体の火葬骨が出土している。自然遺物としてはカタツムリの殻、小動物の骨などがある。築造年代は7世紀前半と考えられる。
5. 1号穴出土火葬骨のうち、石塔下よりまとめて検出したものが幾つかあり、石塔と関連付けられるが、立て替えや、積み直しによる移動によって、直接上の石塔に結びつかないものがある可能性もある。
6. 宝匣印塔の1基の塔身に「如祐逆修」の文字が刻まれ、その塔の基壇直下から、性別不明の未成年骨がまとまって出土したことは、「逆修」の意味を考えるうえで興味深い。
7. 1号穴からは、2・3号穴のような火を受けない人骨は出土せず、また、中世を遡る遺物も認められないが、2号穴とならぶことや、側壁および前面部に比べて奥壁部分が著しく狭く、奥壁壁面の石灰化が、天井部や側壁より進んでおり、2・3号と同様な状況を示すことから、古墳時代後期の横穴墓を奥壁周辺を除いて拡張、再利用したものと考える。
8. 1号穴に収められた被葬者達の社会的身分については、直接推定し得る遺物は出土せず、また、蔵田地内における関連する伝承等も無い。ここでは、有力な名主層一族の墓所と考えておきたい。
9. 今回の発掘で検出された鉄鋤は、7世紀末～8世紀頃に水見市周辺で製鉄が行なわれていたことを示すと考えられる。また、3号穴からは、金銅製の金具が施された大刀が出土しており、鉄鋤の出土と考え併せるとこの蔵田崩邊で、鉄の生産等に関係する一族もしくは工人等の集団が在り、その墓群であると推測できる。

（竹越・岡本・酒井）



遺跡遠景



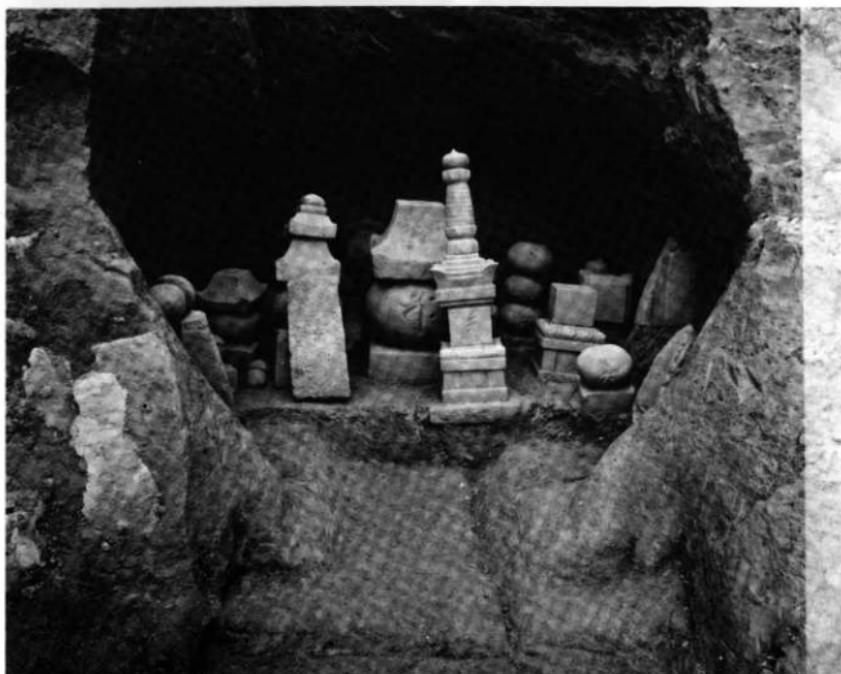
遺跡遠景



遺跡近景



発見當時



I号穴遺物出土状況



I号穴遺物出土状況



I号穴遺物出土状況



中央五輪塔と各石塔の基礎を残した状況



宝瓶印塔(第7図-33)基壇直下出土火葬骨と土師質小皿



中央五輪塔と直面直上の基礎を残した状況



一石一尊仏・板石塔婆の出土状況(向って右側壁)



五輪塔地輪(第4図-2)直下出土火葬骨



中央五輪塔基壇を残した状況



中央五輪基壇の1枚をはずした状況



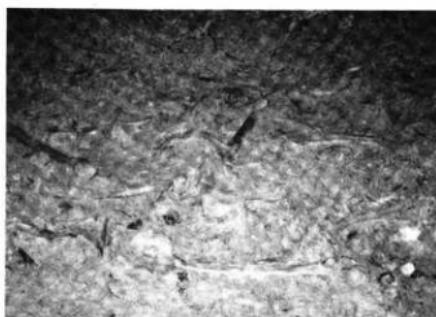
全ての遺物を取り残した状況



2号穴遺物出土状況



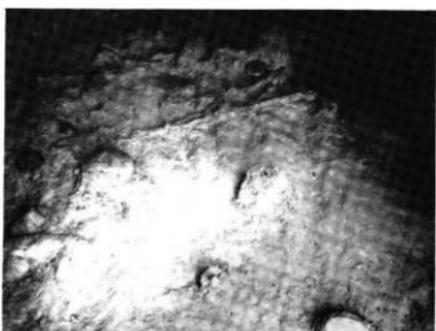
2号穴遺物出土状況



2号穴遺物出土状況



3号穴遺物出土状況



3号穴遺物出土状況



3号穴遺物出土状況



第4図-1



第4図-2



第4図-3



第7図-32



第7図-33



第7図-34

I号穴出土五輪塔・宝篋印塔



第8図の44

第8図の45

第7図の38(7-1)



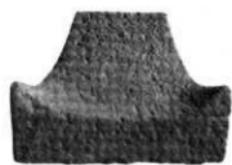
第7図-11



第4図-9



第7図-21



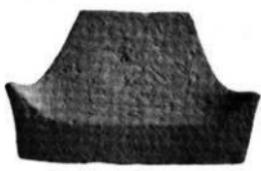
第4図-4 (20-2)



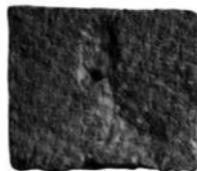
第7図-24



第4図-6 (18-3)



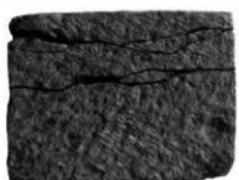
第7図-18



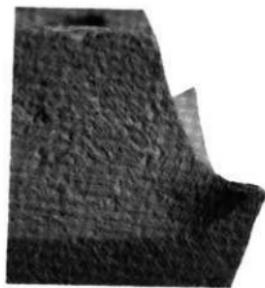
第4図-8 (6-3)



第7図-31



第4図-5 (10-3)



五輪塔笠表面の工具痕



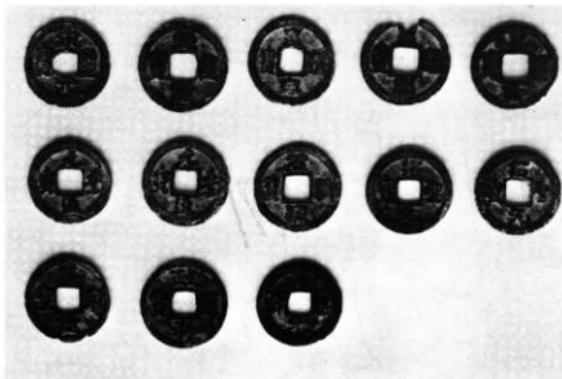
板石塔婆表面の工具痕



板石塔婆表面の工具痕



1号穴出土釘



1号穴出土銅錢



第10図の9



第10図の19



第10図の15



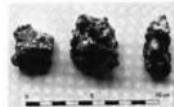
第10図の33



第10図の48



第10図の17



2号穴出土鉄滓



2号穴出土具



2号穴出土自然遺物



2号穴出土自然遺物



第13図の17



第13図の11



第13図の16



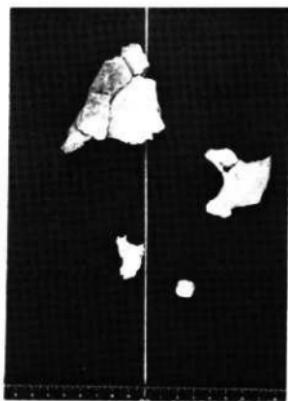
第13図の15



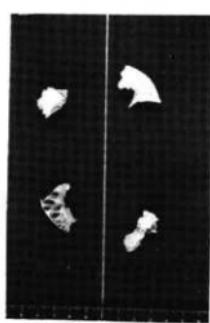
3号穴出土金属器



I号-③ 頭蓋骨 (1:3)



I号-④ 頭蓋骨 (1:3)



I号-⑤ 頭蓋骨 (1:3)



I号-⑪ 頭蓋骨 (1:3)



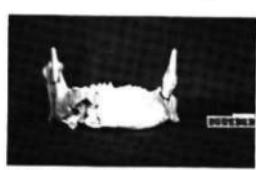
I号-⑫ 体幹骨、体肢骨 (1:3)



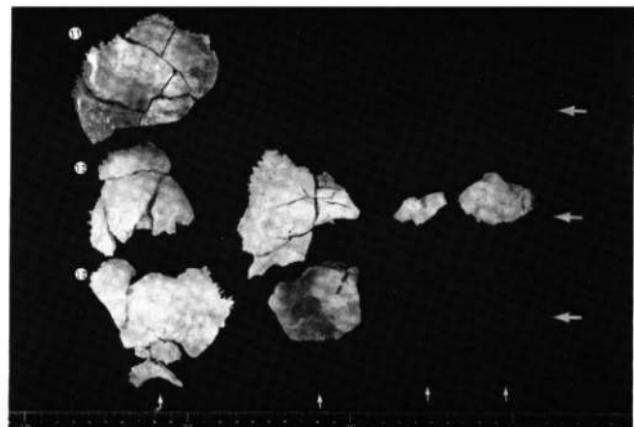
I号-⑬ 下顎骨上面観 (1:4)



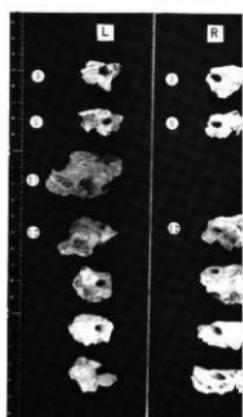
I号-⑭ 下顎骨右側面観 (1:4)



I号-⑮ 下顎骨前面観 (1:4)



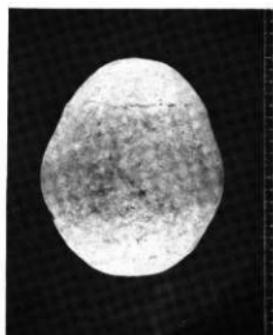
1号-①, ② 後頭骨外面觀 (1:3)



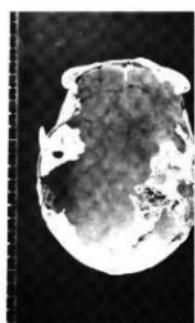
1号-③, ⑤, ⑩, ⑫
側頭骨左右 (1:3)



2号-100 頭蓋左側面觀 (1:4)



2号-100 頭蓋上面觀 (1:4)



2号-100 頭蓋底面觀
(1:4)



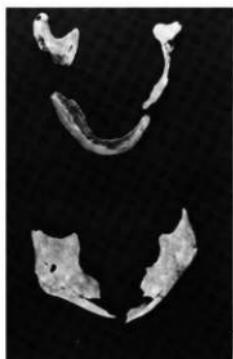
2号-150 頭蓋左側面觀 (1:4)



2号-150 頭蓋上面觀 (1:4)



2号-150 頭蓋底面觀
(1:4)



上: 2号-52 下顎骨
下: 2号-137 下顎骨
(1:4)



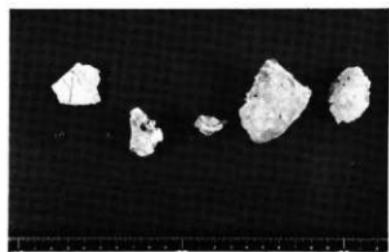
2号-47, 131 寛骨左内面観 (1:4)



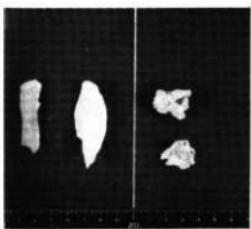
2号-132, 57, 169, 168 上腕骨左側前面観 (1:4)



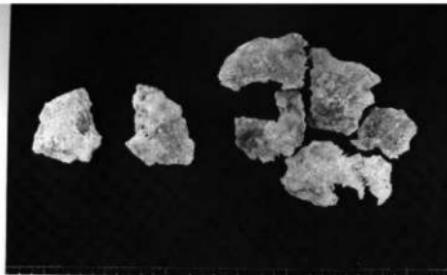
2号-158, 58, 67, 170 大腿骨左右後面観 (1:4)



2号出土人焼骨 (1:3)



3号出土人焼骨 (1:3)



3号-54, 91, 184 頭蓋骨 (1:4)



3号-182 仙骨前面觀 (1:4)



3号-91, 166, 183 下頷骨左側面觀 (1:4)



3号-60, 169, 165, 91, 14 上腕骨左右前面觀 (1:4)



3号-64, 104, 188, 172 大腿骨左右後面觀 (1:4)



3号-105, 176, 181 大腿骨左右後面觀 (1:4)



富山県水見市
萩田薬師中世墓発掘調査報告書

発行日 昭和60年3月20日
発行者 水見市教育委員会
富山県砂防課
印刷 アヤト印刷株式会社